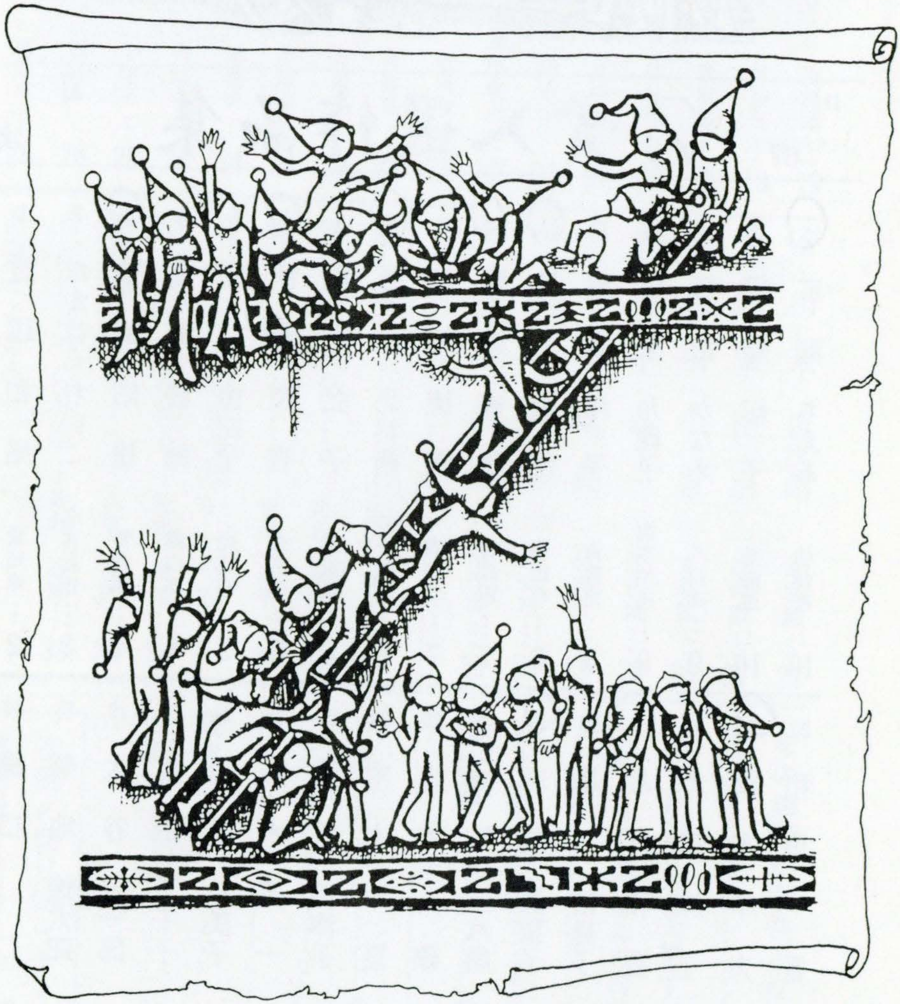
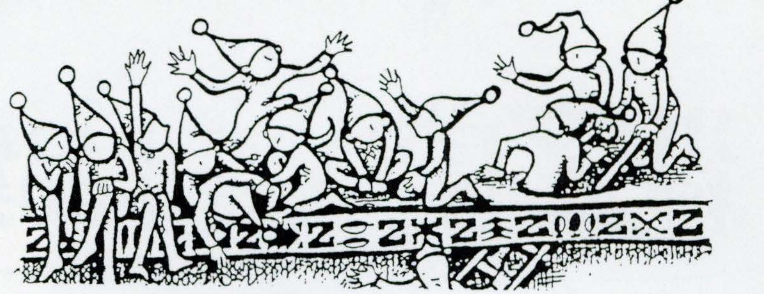
第13回

川柳Z賞入選作品集



Z賞選考委員会



川柳 Z賞入選作品集 目次

1 渡辺和尾 愛知県……2
2 なかはられいこ 名古屋市……3
3 柴崎昭雄 青森県……4
4 前原勝郎 津山市……4
5 樋口由紀子 姫路市……5
6 秋元深雪 弘前市……5
7 板東弘子 香川県……6
8 西秋忠兵衛 八千代市……6
9 梅崎流青 柳川市……7
10 野沢省悟 青森市……7
11 島 道代 青森市……8
12 倉富洋子 青梅市……8
13 坂東乃理子 加古川市……9
14 笹田かなえ 八戸市……9
15 伊藤紀子 北海道……10
16 広瀬ちえみ 仙台市……10
17 樋口 仁 四日市市……11
18 菊地俊太郎 東京都……11
19 大谷晋一郎 高松市……12
20 吉田三千子 名古屋市……12
21 矢島玖美子 東京都……13
22 柿木英一 大東市……13
23 鷲谷美津子 秋田市……14
24 木本朱夏 和歌山市……14
25 山本 礫 京都市……15
26 神谷三八朗 名古屋市……15
27 岩崎眞里子 黒石市……16
28 峯 裕見子 大津市……16
29 あべ和香 花巻市……17
30 本多洋子 松原市……17
31 松本幸夫 福島県……18
32 和泉 香 滋賀県……18

33 みとせりつ子 高松市……19
34 佐藤洋子 伊達市……19
35 佐藤美枝子 東京都……20
36 宮本めぐみ 仙台市……20
37 桐越千絵 北海道……21
38 岩間トキ 網走市……21
39 岡本 恵 水海道市……22
40 藤村みどり 盛岡市……22
41 福井文明 青森県……23
42 福井陽雪 青森市……23
43 鈴木恒子 多摩市……24
44 西海枝みちこ 福島市……24
45 徳永政二 守山市……25
46 斎藤はる香 小樽市……25
47 長井すみ子 福岡県……26
48 笠嶋恵美子 高槻市……26
49 山本忠次郎 東京都……27
50 鈴木南水 遠野市……27
51 島田小吉 東京都……28
52 庄子喜一 仙台市……28
53 大橋政良 砂川市……29
54 北村泰章 高知市……29
55 普川素床 市川市……30

選を終えて……桑野晶子……31
言葉に冒険を……岡田俊介……32
乾坤一擲……寺尾俊平……33
自分の声で自分を唄い〈現在〉を呼吸する川柳を……吉田健治……34
選後感……八坂俊生……35
自己世界への発掘……佐藤岳俊……36
言葉とこころ
その調和が個性となるとき……橋高薫風……37
「半面美人」を推す —れいこさんの内なる明暗—
ある選挙後感……尾藤三柳……38
選後感……片柳哲郎……39
選後感……酒谷愛郷……40
戸惑いながら……渡辺和尾……41
こころざし……なかはられいこ……41
選考結果……41
表紙絵……岩崎眞里子

次回〆切り96・1・31
専用紙を使用してください。

第十三回大賞

愛知県　渡　辺　和　尾

透明な澄明なほとんど皆無の闇へ
水を飲むまもなく雨季のコツンと音
静寂の向こうに海の朝広がる
やわらかいもの足もとの緑の草
樹樹咽せている　私は憂欝に
いよいよと雨の匂いが夢の中まで
いのち映しだすように敗れの原野
炎くる予感でしばらく午後を過ごす
眠りからさめると夢がまた見える
君を語るのか朝の雀の窓越しに

昏い朝くらい指もと見つめ死へ
蒸し暑いから私も怒るとする
浮いているだけの雲だと見ていたり
人間という生きものに穴を掘る
早朝の私に敗れ　また眠る
往復の手紙に微風沸き上がる
行方知れずの心のありか地球儀に
生きものの未来占う寒波・暖波
てでなしごよわい心をありがとう
かざしもの町に着くころ丸はだか

風船を思えよ　いずれ凋む胸
ともしびに敗れた体横転させ
頽廃の香り懐かしモカを飲む
運河過ぎ人の雑音する街へ
描かれた眉だと思う旅のひと
その果ての人も小虫も息を断ち
さまようて前後不覚の雪の中
湖を見たよ青年の瞳に戻る
夢千里　夜が木馬に迫りたり
どこへ逃げようか朝顔が咲いている

第三回風炎賞

名古屋市　なかはられいこ

口笛に呼ばれて月へ行ったきり
君と僕　名を呼ぶときに吃りあう
空に満月ぞくぞく届く不燃物
下着干す月の触れそうな位置に
写し絵の鳥のくちばし負の方位
一角獣の青は青のまま沈め
待ちあぐむ卵一個の静謐を
どの鳥も私を指して寒の入り
絵草紙の桜散るまで無口で通す
半身は夢のさなかで散るさくら

葉ざかりの桜　はじめて泣く桜
捨てながら走る口中錆の味
くちびるがいちばん昏くなる真昼
ゆびさきの魚臭かすかに欲情す
ビー玉が転ぶ　あなたより青く
箱覗くまで静かだった海
釦ちりぢり　かなしみも力なり
指のすき間を人が落ち君が落ち
川の音　近き人から忘れゆく
鳥放つ　胸に黄砂は降りつづき

遠い悲鳴のいつかの丘にも夕陽
君眠る一の花咲き二の花が咲き
血まみれの鳩くる紙吹雪の向こう
黄の花が咲いて掟は破るもの
湿地帯　歌を忘れた鳥歩く
一輌の貨車なり芒満載に
揺すらんやわが身を秋の鐘として
岬には野の馬がいる朝の椅子
おちばする五臓六腑をひらききり
錦秋よ　わたし貧しき一市民

青森県　柴崎昭雄

春灯や吃りはげしき地図展げ
紙の鶴かつて父子のかおかたち
おちこちに川の跡なる微笑仏
一人が生まれひとりが果てる竹の節
臥すこともありやか細き飛行雲
身過ぎかよ手負いの鶴を折りつくし
目ざめてはもろく笑えり影法師
腹這いの跡のかすかなけもの臭
魚群れて柩の隅のうすあかり
人形や果てなき海をこぼして昏るる
夏銀河父の帽子はほろほろ流れ
折り紙の父の朝顔母の朝顔
笑い袋の笑いあぐねる月明かり
霧の夜を吐きつづくしたる舌の荒れ
此岸かな遠き蛍の灯によろけ
ちりぢりにカンナ咲くべし玻璃家族
ほろほろと父かげろうの駅に佇つ
かげろうや爪先さえもまぼろしに
白菊の揺るる身過ぎのかおかたち
けもの消ゆちちははの名を身の限り
人形の影のよろける玻璃囲い
身のかぎり蟹と競えり月の坂
脈々と月一族の継ぎ梯子
木守柿ぐらりと揺れる父の寝息
すこしずつ産毛が目立つ鬼の面
おろかなる魚影曳いて蒼き祭りに
しぐるるや爪なき蟹の一本道は
いくつもの夜を手ぶらの紙人形
雪の馬つぎからつぎと喉凍てり
母の横顔視つめしじま雪舞えり

津山市　前原勝郎

まどろみにひびく水音ふるさとの
天眼鏡の向こうは散骨いろの夏
生は死の一部でありし夏椿
極限のかたちに降りし蝉時雨
父という静けさにいて銀河濃し
時に甘美な罪もあるらん柘榴割れ
曼珠沙華咲くや死を恋い死を怖れ
日暮れ愁（かな）しき長い秋ですいつもより
どこから眩暈どこまで眩暈今朝の冬
薮椿かなしみぽっと微笑せり
満月を掬うてみても寒い両手
冬日むらさき祈りのように無音なり
冬薔薇必死に生きることだけで
太陽凍ててわがてのひらの荒れ田のごとし
行き暮れて骨の奥まで雪降り積む
幾重にも哀重なりぬ冬すみれ
せめてひと夜吾れに欲しきは熟睡（うまい）かな
じっとしている私に集う孤と孤と孤
音楽終りわが思愁期の今もなお
微熱止まぬ頭（ず）の中白くなりにけり
いまも真正面から哀しみが荒ぶ
嫋々と影曳く枯野みちづれに
枯野彷徨風の焔（ほのお）に抱かれては
ひとつぶの残照うれし生きていて
しんしんと骨が哭く日のわたしの悔
寒い月光われとわが影切り離す
いのちの端に落ちてゆくのは冬三日月
おびただしい螢とならば逝くときは
来世には途中下車などせぬように
頬杖やいつか花野で終りたし

姫路市　樋口由紀子

銀紙を剥せば一方通行の道路
シベリア産の森を育てる母の部屋
自己否定沖に鯨がいるようで
満月や金魚を深く地に埋める
おとうとの影が濃くなる県境
砂の上に落としてしまう白い牙
できるだけ象を怒らせ月を待つ
階段の前を流れる不確実
くちびるの意識が戻る薮の中
水底にロバのパン屋はやってくる
盗賊に渡してほしい時刻表
満開の椿を折って帰宅する
透明な波が来るまで肉体労働
砂浜のキャッチボールは夢のこと
男女混合リレー始まる胸の道
いきものの音出しながら折り返す
姉の掌を抜け出る快晴の思慕
秋風に親指で消す父の国
ライオンの横で眠っている返事
複数の淋しさがある丸い爪
地球深く隠しつづける冬の列車
怪獣は壁に凭れて待っている
放課後の廊下に光る少女の短髪
遠雷や従弟の名前思い出す
信号は点滅のまま母の家出
生きるとはほうれん草の根を洗う
いもうとが砂場に捨てる晴天の日
前編が終わってしまう死の話
月が雲に隠れるまでの遊びかな
わたくしのなかの兵士が溢れ出す

弘前市　秋元深雪

夫恋のしじまに鍵穴を覗く
水墨画あなたは何処に皿を売りに
流木が向きあう足の折れた椅子
干からびた生姜 産むべきだった髪
土器の前わたしの匂い強くなる
烏賊釣りの灯が逃げてゆく腕の中
深雪晴誰に打ち明けてもひとり
地に墜ちたトマトのなかの淡雪よ
松ぼくりまわりは棘のある身内
人形を埋めた地にたんと山吹
六条の御息所　寒椿
「感じない」「感じる」ピーマンをつつく
セロファンがきゅうくつ上向きのつぼみ
包丁をかざして昼の飛び魚と
人参をむしばむ人参のえくぼ
椿姫こころは砂の惑星に
独唱や合わせ鏡が見つからず
巡礼に遠く地平線のパセリ
零余子ぽろぽろ言葉を慎しんでいるが
桃の種含めば海に墜ちにけり
蝶を待つ樹海にひとり地下の駅
なんだろうこの寂しさは芋の泥
夫とは別のしあわせ生姜買う
葱の根を煮るや人肌とり戻す
口論も懐かしくなり合歓の花
涅槃図に加える夫冬の猫
犬の良き性をはなれず花の岸
瞳孔はひらきつつあり匂いひば
山茶花の芽のふくらみと輪唱す
鬼灯が祈りの月となるまでを

香川県　板東弘子

月日耕す狂い田の重い水
踏絵以後影を濃くする亡夫(つま)は風は
白い椿を敷きつめている夢獄(ゆめひとや)
草笛のよどみで抱く眠り仏
石仏　風化を許す指の冷え
地蔵の耳の地平傾く長閑か日の
祖父の樹の神かや人の気配して
転生や赤い鼻緒は地を這えり
懐の少女と駈ける稗月夜
春の男と万葉の木に登る

多羅葉樹の葉脈深くして愛は
石橋をひとつ置いては月の閨屋(ねや)
母の影の長さ振り向く花卍
旅の途中だろう野の只中に佇っている
蝶沈み枯れ葉彩なる巡礼歌
列続く花屋で拾う数え唄
夢は夢でしかない弥勒の指先よ
月満ちて手招く葦かちちははか
父の哀歌をほのかに包む風仏
ほころびを紲す糸とも女とは

性を憎むと片側冷えてくるベッド
わたくしの寝顔を洗う走馬灯
ふいに雫真夜の時計と戯れて
忌み月の芒あふれる月の暈
錠剤の我が影を射る菊の白
亡夫の木椅子に躓く様を見ていたか
盛飯の茶碗に残響がこもる
女系家族の耳から消えていた宴
流浪かな壊れた故郷をまた抱いて
何時までも川のほとりで桃を待つ

八千代市　西秋忠兵衛

春は電車でパーカーを買いにいく
小春日の岩波さんの国語かな
菜の花が専業主婦のように咲く
いっぽんはわらっていない桜の木
山女魚釣る不要不急の雲の下
水掻きを見せて改札口を出る
サラリーマンのうしろにならぶサラリーマン
ジーパンのポケットにある昨日の牙
兵隊のようにならんでいる玉子
自転車の背に山積みの妻子かな

地球から2DKを借りている
どの木にもだれかのぼった跡がある
この国の枝に帽子をかけておく
実用にならない穴を掘っている
農夫も俺も耕している　ともかく
世の中がテレカの孔をぬけてくる
堕落論　沖の夏雲うつくしい
実存やたとえば洗面器の深さ
人形の首を見ているテロリスト
血脈をくだるポンポン蒸気かな

日本海の波をかぞえる　母をかぞえる
父の木から正露丸がこぼれる
四、五本の傘と家庭が干してある
いつもうしろでドアーの締まる音がする
戦争の話はしないところてん
ケロイドの下をながれる五〇年
牙は象をわすれてしまう改憲論
まっさかさまに神戸へ墜ちてきたジュラ紀
死んだらあかんぞと大声でハガキ書く
助かった自分をほめてやったという

柳川市　梅崎流青

くちすへばどこか遠くで落花音
花菜漬おとこに噎せるものがある
さくらさくら乳の匂いの母恋し
研ぎ終えた刃物に映る鼻の穴
人の死はどうあれ麦の穂はのびる
虫を踏み潰す火葬の列にいて
火葬場の扉は歌うように開く
祝歌を聞いてくちなわ輪を解く
木は裂けて昨日の憎を白日に
満月と響き合うのは父の喉

許されぬ逡巡竹は皮を脱ぐ
干し魚の目に恋々と残るもの
鶴の真似してどん底を抜け出そう
ひかり溢れ牛まっすぐに歩けない
疑心まだ晴れぬ蜥蜴は青く濡れ
少年の生傷何を守るのか
黙祷のまなこ開けば倦んだ街
みずいろの鶴に折り込む敗戦忌
川も涸れ人涸れ冷めた粥啜る
軍用機見上げ農民脱糞

虚ろなる時間を食べて柿太る
蟷螂のぽきんと折れて季が移る
秋の雲流れ仏の飯尖る
てのひらの栗転がして銭のこと
秋の蝶通り過ぎたる郵便夫
新藁の匂い欲情ならいまも
花火見る病者は白き喉見せて
寒気団降りて失くした歯をおもう
満潮には沈む地蔵の欠けた耳
冬日かげろうこの生涯に奇蹟など

青森市　野沢省悟

連作「輸卵管」

影を忘れた白鳥が鳴く鏡の湖(うみ)
背のすじに小蛇を放つ雪の黄昏
水銀の球あつまって乳房となる
卵黄をひそかに愛撫するときに
くちびるは箸ゆるやかに含んでいる
しょうゆざしに残るしょうゆと見つめ合う
サランラップ魂ほどにくしゃくしゃと
液状の螢がにじむふらいぱん
スプーンの曲線に指すべらせて
雪原に鴉の舌の赤　灯る

地吹雪の生まれるまでを鍋の蓋
ふくらはぎの静脈に棲む小魚は
うなじの蒼　に降り止まぬ雪掬っている
あかあかと揺れるかかとの毬ひとつ
毛髪がグラスにもだえ雪の月
めくるめく雪しゃりしゃりと林檎噛む
フォークの尖端に散るささめ雪
頬をほどいて波紋ひとつを奪い合う
刹那の声　雪降り止まずふりやまず
血を少し雪にこぼして雀の子

ひからびた雪ひとひらが爪となる
臍のくぼみを灯台として夜の雪
煮くずれた蝶の姿　雪あかり
いくつもの背を通らせて　窓の透明
肩に胡椒をふりかける指　指だけに
瞳の中に夕焼けそして鴎の死
輸卵管はるかな星に降る雪と
漂う時計　みかんの皮を千切るとき
生姜擦る臀部のまろやかなほつれ
影を拾った白鳥が去る鏡の空

北に生まれてたんぽぽ影を長く引く
春うらら冬を脱げないかたつむり
花冷えのいのちを包むオブラート
月煌々闇いく枚を掌に掬う
長雨の紙人形は泥にまみれ
どの彩に咲いても雨になる紫陽花
つらら一本私の今日が垂れさがる
投げられた言葉お手玉遊びして
潮騒の青になるまで掌を晒す
友も無く子も無く老いてかきつばた

月光は清音　誰が哭く夜も
抱擁の視野いちめんに跳ねる魚
人形を抱きて何を孵さんや
落涙は海のはじまりその深さ
追憶の昏さに波がうねりだす
星のない夜空に口笛を放つ
運命線に逆らう錆びたカミソリで
誠実であるべし背骨鳴らしても
指紋ほどいてまっさらなわたしを織るよ
乳房切開　熱持つ星がこぼれでる

青森市

手鏡の中にわたしがいなくなる
どの歌を歌えと言うか曇天に
飛び乗ったバスが枯野に来て止まる
結べない糸が流れる冬の川
目も耳も閉ざして花瓶しぐれゆく
風車ちぎれて長い冬を編む
母に雪降る傾いて行く裸木
花いくつ咲かせ綿虫ぼたん雪
葦折れて喪の舟いくつ行き過ぎる
壁づたいに歩く壁を見た日より

青梅市

花食うや狂いはじめの祭りとて
春うつろうつろ手鏡とり落とす
告白を終えてやさしく枯れる舌
わたしを描けば青ばかり減る絵具箱
くちづけの刹那に雨の音　いつも
しゃぼん玉吹く失望に押されきって
虚言癖廻りつづける風車
裁かれしものみな河を目指しゆく
初夏の牛睡恐れるものは死にあらず
寡黙なる告白　朝顔が開く

島　道代

髪風船つけば雫れる雪時雨
プチプチと霧の時間を噛みながら
手花火よ掌に死を育てつつ
カラスより黄色い吐息ころがして
沈み続ける根よ空は蒼々と
ヒバの香の橋から青い実をこぼす
米を研ぐこの夕焼けをうたがわず
たった一つの道かも知れぬ吾亦紅
まだ何も見つからなくて蝉しぐれ
白い風に転がる私の行方

倉富洋子

紙ヒコーキの落下地点から、真夏
入水者の絶えぬ川ありほうほう螢
慈悲無用蟻の骸は蟻が曳く
針一本みごもり夏はまだ続く
男ひとりを刺せずに何の酷暑かな
終焉へすべりすべってゆく紅葉
疑問符のかたちに膝を抱いて秋
花屋は休業逢魔が時は火の匂い
かごめかごめの鬼に角なき夕まぐれ
捕虫網手に手に月を狩りにゆく

春や春　犬をたたけば土埃
花びらを集めて春の重さかな
手のひらが熱し眠りにつく人よ
少しずつ捨てる見られて困るもの
願いごと呪いと少し重なりぬ
針山を作るわたしの髪入れて
太陽電池で動いています私も
少年の名刺がわりの宙がえり
適当に捨てて下さいわが手紙
神様のお告げ聞こえるバスの中

鬼になるしかないのだと鬼になる
土ぼこり　やや漠然とある明日
午後四時の明るさいつだってひとり
求め合う予感はあった草の道
ひろうのはわたし　すてられてください
深い赤憎んで憎み切れぬまま
焼かれるであろうそれでも火蛾は火へ
抱きあってまた確かめる火の匂い
いま闇に傾く膠着の裸身
ここからが糸杉の闇気は確か

加古川市

変な人と言われて変な人になる
人を噛む犬には犬の事情あり
ひまわりは病気　とにかく寒い夏
台風に乳歯のごとく家動く
生き延びよごま粒ほどのかたつむり
全力疾走したかった　あのころは妊婦
少年のような悲しみ足の裏
駄菓子でも食べて私の誕生日
現在のわたしの基地となるこたつ
犬と駆けまわる深夜のグラウンド

八戸市

愛懶惰　睡蓮の花動かざり
ゆりかごにゆれるわたしをもっとゆらして
朝がくるたびに女になっている
青梅の落ちてあやまち　あやまちか
栗の花匂えば栗の花さがす
ふしだらな葱白いところが白すぎる
順風満帆青いドレスに青い靴
蛇いちご蛇になったら食べられますか
人の世のたとえば青い烏瓜
台風一過こんなに私なまぐさい

坂東乃理子

スイッチの音だれかいる台所
放心やちらし見ているふりをして
隠れよと言われ隠れて一時間
靴下のにおいをかいで犬無言
キューピーは腹囲気にせず生きている
泣き顔のみっともなさが好き　真冬
愛なんていらない　こたつさえあれば
正座して犬もわたしも春を待つ
私死んでも電話はかけてあげるから
父母は妹びいき永遠に

笹田かなえ

憤り　ぐんぐん青いプラタナス
死は身近　整然と工場地帯
神に似て神にはあらず塔聳える
愛断ち切る金色の音響くよ
やさしきひとのねむるやわらかそうな土
平凡なかなしみ　海が深すぎる
ジャズの店愛したひとに遇えそうな
レモン噛むこころもとなさ冬逝けり
明日咲く予定の花を購ってくる
湯上がりの虹立つ肌と思うなり

北海道　伊藤紀子

不凍湖の底をただようカレンダー
霧が生まれて水想劇場開演す
昏れやすき村の戸口の水ランプ
彫像の心音となれ湖の韻
朝霧夕霧水の器に添寝して
指笛につい戻される紙の舟
水回廊たゆとうものを抱きしめる
湖荒れて観音堂の水茶椀
青く咲く花やもしれぬ水の繭
唐辛子声なき村に吊されて
水際のポストへ通う尾の無い魚
素手素足　火の見櫓に愛されて
村中の耳一本の葦倒す
梨の花母の繰り言やりすごし
父の忌に忽然と咲く桐の花
喪の席の姉妹は同じうすい耳
夏帽子いっそ世間に晒される
蝉の駅背を駈けぬける走馬燈
桃むいて産んだ子の数放念す
母の沖ぽっと灯のつく合歓の花
髪梳き合う童女もいつか戦する
味噌豆もあずきも母もこぼされる
鳥の巣の少し狂った座標軸
水底で丸くなりゆく放浪癖
揚げ芋も峠の視野も雪もよい
朝のパン抱きしめもどる水の村
雨の木の種を播いてる虹の村
ほおずきに灯を入れ水の魂祀る
明け暮れの四隅に湖の子守唄
眼裏に実生の森がびっしりと

仙台市　広瀬ちえみ

鳥抱いてひんやりとした木に登る
両足を通す湿ったジーンズに
壁際に寄り添う棘のある身体
ガラス箱に閉じこめられている叫び
晴れた日のこっぱみじんの黄色です
部屋ごとに落として歩く髪の毛や
悪いことをしてきた猫を洗っている
指一本さがしに戻る星月夜
雨になるフランシーヌが降りる駅
もっと近い出口があったとは思う
椿落ちる音でいっぱいになる体
ひび割れたガラスの長い一日
うしろから犬の名前で呼ばれたり
いつだって首は曲がって鏡にうつる
時計鳴る　誰も使っていない部屋
トンネルの暗さに慣れてきて歌う
水仙と同じ高さで夢を見る
人声のしない処に産む卵
暗室に風船いっぱいふくらます
バラバラと解体　魚を描きあげる
笑わない家に子犬が来た日です
首伸ばす　羊歯植物の間から
糸をぴんと張って一日中走る
物干しの潜水服の滴音
虫食いの葉っぱをつけてそよぐなり
もうひとり落ちてくるまで穴はたいくつ
満月やキャベツ畑に敷く布団
花の絵の中に歩いて入ってゆく
眉を描く　水はあふれるほど満ちて
虹を架けにゆくからオーイ手伝ってくれ

四日市市　樋口仁

土砂降りになったら傘と花を購う
原色の自転車がある妻の秋
一匹の金魚が父を飼っている
爪を噛むように小さな秋を噛む
小指一本沸騰させている深夜
本棚を整理している脆い刻
現像をするたび遠くなる月よ
父の肋が渡り廊下になってゆく
沖ばかり見ている夜の洗濯機
下駄箱は古い童話でいっぱいに
花屋の前に日付け変更線がある
珈琲があるわたくしのテリトリー
傷口をひらいてみれば外れくじ
指先で夜を探している夫婦
夕映えの中なら折れる紙の鶴
ポケットの闇をまさぐるのが好きで
火の橋を渡り終えると晩ごはん
めくるめく一夜が遠くなる敬具
父の字を形状記憶して果てる
対岸がこの頃見えぬ洗面器
火も水も郵便受けで揺れている
枕辺に千切れた雲が現れる
返り血が電話口から洩れそうで
窓を拭くわたし自身を見るために
眠らねば夜が雪崩れていくまえに
日当りの良い縁側の処刑場
父という潜水記録だけ残る
今頃誰だろう瞼の裏を通るのは
満員電車で無色無臭の息をする
脳天に焼却場がある男

東京都　菊地俊太郎

揺り椅子のふっと疑う明日の景
散歩から引き摺って来た蟹の殻
工房に抑揚のない鳥の声
べとつかぬ言葉をさがす冷暗所
窓越しの浚渫船も渇いている
団欒の深みにはまってく肋
壁掛けとなるひからびた耳である
足型をわたしの沼とうそぶくか
海底駅で口走る氏素性
錆色の沖へ漕ぎ出す修復師
納豆の糸に視線をふさがれる
猟犬がうろつく世紀末の路地
逆光に浮かぶ皺だらけの兵士
手袋の穴から骨だけが見える
市民ランナーのしたたかなメーキャップ
わたくしを売る簡単な注意書き
ラッシュアワー窓に無数の梟の眼
水たまりに映る明日の時間割り
眼の前にいつもちらつく取り消しボタン
ひとり旅の果てに覚えた止血術
呼吸法をがらっと変えてみる個室
消毒班がふりまいてゆく単語
分骨器ごろごろ活字ごろごろ
追悼文は菓子皿の下にある
ドアの把手の包帯を巻き直す
剃刀の替刃いちまいのちいちまい
回送電車のおびただしい抜毛
洗浄器に泳がせておく片眼鏡
人嫌いがますます募る薄荷飴
肩の雪払う電線の雪払う

高松市 大谷 晋一郎

猫の墓ひいふう、いつつ草の餅
水鳥のザブンと湖に俺ひとり
この路は墓地へ続いて父を捨て
臥して野の鈴鳴らせしが花枕
過ぎてより汽笛は耳朶の花園に
黄蝶よ水鉄砲を隠し持つ
菜の花の吹かれ降りゆく黄の花火
野苺をつまむ手忘れてはいない掌
島二便は老人と猫とニワトリ
麦焼きのその一面に起つ仏
路折れの塚は女人の花あられ
受胎告知幽か樹林の桃色に
草を負う背なより蛍散りぢりに
夕景に蛍舞い降る家のあり
蛍ほたる母の裸身のあらわなり
大人一枚見世物小屋を出て炎暑
塚一里浄土本願百日花
夏蛇の天 ぬけがらのまぐわえり
粥食べて秋の彼岸の昏れ易し
かぜ日和 秋を担いでゆく田螺
柿の皮くるり観音袈裟を結ぶ
銀杏をむく四十おとこの川遊び
月昇るあわだち草を分けてより
愚猿弦月 水藻の影を破るのか
俺の顔を猿が離れない 夕日
松脂の髪かたくあり手で梳くも
樹の渕をあれよと風の盛られゆく
冬は盗人腹ばいにでもなるか
背の冬日落葉を掃くもわが死後も
足早になるも古墳に婆連れて

名古屋市 吉田 三千子

夜の月 見ていてふうっと死のなかへ
死ぬときの布に巻かれた生殖器
崩れゆくわが領分の薔薇の数
それからのうなじに届く雨の音
夕日も雪も球形の野に臥せる
桐残る ふくらはぎまで夢の雨
紙の魚たれも知らない泉まで
桃桜からさようならさようなら
最初から煙のようなものだった
わが愚鈍 花はふるふる桃色黄色
散ってしまえば次なる桜
この橋はひっそりと人を渡す
傘さして傘さして 空になりぬ
一行を問いつめてゆく月あかり
月光を逃げることなどない靴と
ダリヤ揺動その静かなる腕を添え
死に花にぽとりと音があるように
夢合わせ雪の来ぬ間に凍てぬ間に
太い首から狡猾な音 管楽器
絶対の唇を抉じ開け哀しいね
死ぬほどのことより雨の唄探す
嗚呼 海は平然として引き潮に
かーてんの襞やみくもに逃避かな
自由に椿うとうと咲いて削がれたり
踏んではならぬ縄はまことに形而上
さくら餅 左の耳が湿ってくるよ
理に適うまっすぐな黒 聖書持ち
朝を迎える月と四つ折り新聞紙
落葉以後の雨に濡れたし眠りたし
黄の海に百年軽く落ちる落ちよ

東京都 矢島 玖美子

家族にはなれないひとと死ぬ話
歯を磨くわたしの横にいる他人
ぐうたらに過ごす運動会日和
約束をすっぽかしたい午後の道
愛にこだわるわたしの爪がうすくなる
しょうもない男が待っている港
触れてはいけない恋人の旅鞄
別れると九十九回は言った
男黙す大きな鈴を飲みこんで
唐辛子わたしの罪と同じ罪
美しい人の視線に耐えている
完璧に君を忘れる除夜の鐘
みかん風呂ひとりなんかであるものか
死を選ぶ人にはやさし冬の海
きっぱりと晴れかなしみが押し寄せる
緑濃き季節わたしは捨て鉢に
大人にはなれない不眠症続く
死ねそうな今朝の洗面器の深さ
わたくしをたたきのめして雨あがる
無為無策 徹底的に布団干す
職棄ててしばし明るい我が未来
誕生日自分のことだけを思う
生きねばならぬスイカの汁を飛び散らせ
雲重しわたしにふさわしい門出
届かないものへぶらんこ高く漕ぐ
攫われず飼われもせずに私よ
ふいに晴れこの世の抜け穴を探す
今ここで笑うあなたを記憶する
女ひとり片手で掴む広辞苑
生き直したい紅葉のど真ん中

大東市 柿木 英一

秋ざくら母より遠きもの見えず
返し歌魚のかたちをして眠る
葦笛を尋ねて行きし置きぐすり
瀬を逸る流木なれば男歌
白桃を確かに過ぎる句読点
叶わねば野火に焼かれよ鬼薊
ただ一途処女雪を来る郵便夫
念じつつわが創世の青砥石
遠い日を呼んでいたのは金魚売り
一枚の舟底板は身の証し
また一人翁去りゆく潦
置き去りの意識の隅の古い斧
歯ぶらしが一本立ててある途中
哺乳壜倒れ橋向こうが光る
ある朝の生きねばならぬ茄子の紺
ていねいに箸を揃えて置くいのち
単線の貨車に始まる流離かな
ほどけない紐と仮眠の夏の家
存命の鏡に巡る春山河
通夜の灯を遠く夜汽車は過ぎ行けり
透けてくる助祖国をぶらさげて
味噌蔵の味噌樽君が代を歌う
お后はさびし禁猟区の微笑
年金に馴染む絵葉書の風景
画家の名を聞いて額縁を決める
ベストセラーになった瀬死の白鳥
一度聞いてやろう案山子の言い分
踏めば開くドアー桃太郎はいない
果樹園で古い自転車解体す
満天の星を見ている難波船

鷲谷 美津子（秋田市）

無頼派を気取っておれぬ割烹着
指しゃぶる目にいっぱいの好奇心
どってりと添い寝私もほ乳類
母と子で天下御免と昼寝する
出さぬから来ない手紙を淋しがる
甘い水好きな蛍を笑えない
愛情を風の形にするうちわ
子を抱いて熱をあげてるもらってる
赤ん坊が眠れば動きだす時計
家内安全願う形の握り飯
門灯が消えてる妻が怒ってる
言い訳の多い箪笥が閉まらない
荒れてゆく手に言い訳と自負がある
快活でいよう子どもが起きている
寝付かせて私もまるくなって寝る
私を埋める桜の木を探す
弱音吐かぬ男寝返りばかり打つ
まだ傷つく自分に安堵してもいる
幸せが人の形で背に眠る
父と娘のお風呂何やら秘密めく
この雲も今日の私も一度きり
身の丈にあった手帳を一つ持つ
カラオケバー誰も国など語らない
人ひとり捨てる痛みも知るピアス
窓磨き空を三ミリ近くする
言い訳をしてもいいよと虹が出る
危険球ありの男と女です
牙のある男とうまい屠蘇を酌む
午後八時いたわる言葉探し合う
子は母に母は夫に触れて寝る

木本 朱夏（和歌山市）

幸せの素描が朝のパン皿に
桐の木を植えて楽しい夢をみる
身のうちに確かに熟れてゆく木の実
誘惑にころぶ林檎の木の下で
弱みそで恋のニアミス繰り返す
道ならぬこと思わせるひとの指
花びらのような下着が唆かす
淋しさと背中合わせに恋成れり
火を点すさむい男の肋骨に
寄り添えば胸の谷間に鈴が鳴る
狂わねば逢いにはゆけぬ寒椿
おとこの背見送ってから棒になる
何の科あって柘榴は身を曝す
相見てのいよいよ重き十字架よ
前世からの縁おとこに飯を盛る
ジェラシーという粘土細工が掌に
着膨れて男をひとり見失う
合鍵を返し唇がさむい
さよなら三角夢の続きは次の世で
こいびとをかえるわたしのころもがえ
鬼も蛇もかえっておいで淋しいよ
不服言う唇がいつしか嘴に
折れ線グラフの谷間で殺意抱いている
ひとかわを剥けば傷だらけのりんご
葦に風吹けば肋がきしきし鳴るよ
不意に銀木犀わかれた夜が傾れこむ
散骨の視野いちめんの曼珠沙華
秋立ちぬ旧いシネマを切り捨てる
こぼれ萩　わたしに何ができたろう
魂が売れ残っている冬の本棚

山本 礫（京都市）

焦慮烈しき　樹々たちのなかをゆく
罠を抜けたのか影法師いなくなる
姥捨ての年頃　姉たちよく笑う
転がれば　行方知れずの俺に似て
波打際にいるのを笑わないで下さい
鏃鋭き　一通の手紙
雑学の最たるものに理髪店
綺麗な女だな　うらぶれないように
ぶどうむらさき　ひとりの指を染めている
敗北を晩夏の蝉は知っている
秋だった　転校少女が好きだった
老春という　沸点はかなしいぞ
殺気が走る　妻よお金がないんだね
なまぐさし　一錠　二錠　掌に
雨は静かに　眠狂四郎のように
フラメンコ　老いは静かにやってくる
所在なさそうに　歩いていった亡父
好きな言葉を帽子に入れて帰ります
謎を美しくしようと人は老いてゆく
禄高で楽しく呑んで帰ります
人魚を探しにゆこう　定年になった
虹になれよと　紙風船をとばす
酔っているな　言い負けて来たな
戸惑いは　わっとさくらが咲いたから
ねずみ花火　愉快になって下さいね
封をして下さい　わたしの生き恥を
地獄へ行っただろう　男へ石を積む
疑似餌の街で　いつも転んでばかりいる
トンネルの長さをボクは喋らない
いつまでも未完成だね　泣き虫だね

神谷 三八朗（名古屋市）

おんぼろ地蔵が終点の縄電車
下絵では亀がたしかに勝っていた
掟通り辞表に載せる男の字
孕み地蔵へ子種を返す絵ろうそく
石の愚直を愛し一つ積み二つ積み
木まくらや昔の母は泣かざりき
敵は幾万風の来し方静かなり
都落ちのその後復縁したそうな
まだ逝けぬこの大根の白いあまさ
体臭のない女と昼花火見ている
意気投合オルガンで歌う君が代
みゝな静かに聴いてよ母の読経
わたしは私の字で書く果し状
張り替えたイスで一枚妻を撮る
逢いたい人が着くのは次の次のバス
少し残った一日を話し合う夫婦
鏡の裏の秘密をあばく碌でなし
妻の風邪が治った薬服んでみる
誰も居無いに太郎の凧が揚っている
むかし程でもないが赤い花を買う
ライバルが先に来ていた水飲み場
一日一善戻って来ない傘もある
悪女ひとりが悪者でない花の下
木の実ころころこの頃孫が寄りつかぬ
今日もご一緒してくれたねぇ飯茶碗
女はその後夜泣きこけしと棲みしとか
庵主さまは女で葱刻んでござる
愛よ恋よと何血迷うて弱法師
革命前夜妻としたのは指角力
人間やめられず買ってある経本

「未来縄文」

黒石市 岩崎眞里子

誕生の銀河雪降り学生釦
折れ線のただひとつだにないたまご
海へ海へ弱さ燃やして殻捨てて
とれとれの孤独・鬼灯・少年達磨
桃禅師あらん限りの静と動
哲学のじゃが芋なりし作務なりし
太陽とひとりぼっちを共有す
子の背なに指ピストルが浮きあがる
子育ての何と大きな穴だろう
休ませてあげよう濡れた学生服

朝を生むむらさきの果て獄の果て
母の子ぞ血を吐くたまご賜りし
子と見しは夜明け手前の山姿
蝶澄めり青める者らの中にいて
来し方はほたるの光壷の中
せせらぎの卒業番号春の耳
翔べと言い翔ぶなと言うは母の訛
ここまでは土中ここより狂気圏
君は何者?答えいよいよ始まりぬ
以後も日没何を見んとて滾る血ぞ

祈らずばなるまい母を集め来て
十八の解体新書 土筆電動
風に向くこの世が好きなたまご達
花の乱母はははこべと申します
泣き砂を越えて鬼の子私の子
吹き荒ぶ羯諦を行く撫の子よ
ニンベンの形で続く枝分かれ
置き去りの母を生きねばならぬ夜明け
未来縄文こころは地上何センチ
大荒野めくれば銀河常設展

大津市 峯裕見子

干瓢を執念ぶかく結ぶなり
樹の燃える匂いを髪につけたまま
春嵐女のものが飛んでゆく
桜散る大きな声でする返事
虫ピンを一本刺した地図がある
A級とB級に分け韮の束
海が見えて胸のボタンがじゃまになる
新聞と牛乳止めてから逃げる
ヤーレンソーランとひと夏を踊って暮し
くらやみに目が慣れた頃死ぬんだよ

きんつばがきっちり十二入る箱
浮かべたり沈めたりする男の名
ゆるやかな諦観つながれた豹の
木の菩薩その剥落を見に行こう
ええかげんそうな人をさがして道を訊く
人間てかわいいNHKのど自慢
字体変換クモヒトツナイソラと打つ
ほんとうは大きな犬を飼っている
水を欲しがっているのはこころなんだよね
襖取るだけで喪の家らしくなる

白い喉をあけぼのの色に染めるとき
落下傘好きだ好きだと降りてくる
束ねた豆殻でふるさとに火をつけよ
別れの頃に拾った猫がうちにいる
注連縄の男瀧に打たれたいのよ
夕焼けに向って少し前のめり
途方に暮れた傘を一本持っている
この秋の水が溢れている机
文鳥の爪が握っていたものは
エレベーターの「開」を押えて待っている

花巻市 あべ和香

白樺路ゆらり賢治とすれ違う
北窓の蜘蛛よおまえも寂しいか
寄せ書きのひとり消し去る砂嵐
ひまわりの祈る形や原爆忌
鎮魂の痛み続きし百日紅
なぜなぜと問うことばかり指ぎつね
マシュマロの孤独を刻む喪の時計
ふるさとの雪よりしろい白しらず
割ろうとする卵の中で声がする
週末のロゼもわたしもピンクいろ

わたしから脱け出た骨を探す旅
ももさくらだんだん癒える失語症
うつの手でひまわりの種選っている
神様の投輪がぼくの首にある
ほおづえのどこまで続く雪野原
さみしいよ 陰へかげへと伸びるつる
たて結び直し直され冬銀河
ゆびぎつね 今日はあなたの胸の位置
排卵のにぶい痛みや昼の月
けだるさは風の囁き聴いてから

迷彩服脱げばまっすぐ歩けそう
ゆびめがね未来を覗いている童女
視えますか 芽ぶき始めてきたわたし
春の文 ひらひらひらと蝶が書く
呑み干したグラスの月が胃でゆれる
ピラカンサまっかな嘘もありぬべし
さんまさんま恋の苦さを焼き焦がす
ジャズを聴くすこし濃いめのモカふたつ
ホットミルク最後の一行書き終える
小指と小指 幻想曲が始まりぬ

松原市 本多洋子

種あかしが下手な立春のピエロ
向日葵から貰うシンプルな脳波
川に放つバケツ一杯のいのち
サーカス団去り泡立草の雑談
檸檬忌のレモン致死量の匂い
指にからませる酸味のある約束
鉛筆ふいに倒れ枯野の火柱
水際で乾かす傷つきやすい地図
伎楽面の鼻欠け宙吊りの喜劇
海図一枚しなやかな魚になる

春はほのぼの男と食べるにしんそば
恐竜館で拾った噛み合わないコント
象の耳揺れピアス揺れ雨乞い
ゴキブリを助ける緩慢なスリッパ
少女はじけてオレンジ色の洗濯ばさみ
壁に凭れているスランプの牝猫
魂をそれたらしい青林檎のナイフ
鬼を担いで橋を渡ったことがある
転げ回った跡が日記の半ほどに
地図の裏を確める用心深い猫

調律中なんです夕焼線上のアリア
喉きゅんとしまる悲しみ通るとき
芸に疲れた夕陽の中のフライパン
ある朝の不安ほろりと枇杷の種
哀しいときは溢れるほどの水を飲む
忘れた帽子は真夏の駅で今も白いか
橋のたもとで般若の面の割れる音
あれは奔流だろうか吉祥天のうしろ
花野まで湿った耳を埋めに行く
釘を打つのは笑い話を入れてから

福島県
松本幸夫

紙コップの中で揺れてるわが波止場
雪深しフィナーレまでの絵画館
原風景に芝居の下手な父が居る
箸立がはしゃいでいます春の膳
ひとり遊びが上手になった春の風鈴
一期一会 花咲くドラマ散るドラマ
毬が転げる そこから先がおもしろい
箸の先あたりで巡りあう情け
ゆきずりの街で雨降る古本屋
ジェラシーがゆっくり沈むピアノ弾き
クレソンの花咲く雨後の街はずれ
裏切りは止そう 一輪挿しの花
人込みに紛れ鮮度が落ちてくる
見かけだおしの男が転ぶ朝の駅
水の深さを知らぬ故郷の水すまし
煮こごりを掴みそこねた運不運
少年を無口にさせた小鳥の死
写経千枚 一枚ごとにある無心
雨だれを数えるだけの平和論
人間讃歌ああひとり散りふたり散り
水のない川を流れてゆく喜劇
告白が続くレモンの一行詩
花が散る 熱くするもの祈るもの
ひたひたと手酌に満ちてくる涙
鉛筆が折れる 静かに波がひく
秋の天 蔵書一冊眠くなる
一ページごとに手あかをつけて冬
冬の月グラスの底にしまい込む
切り株の深いところに火を溜める
ラストシーン一気に満ちてくる海よ

滋賀県
和泉香

紙吹雪長い手紙を切りきざむ
両腕に子供を抱いている写真
誰からも手紙の来ない秋楽し
向う側にもバスを待ってる人がいる
恋人は朝の匂いのする人よ
「さくらんぼ入っています」やさしい字
恋をするわたしに誰か気づいてよ
仕事中なのにあなたを思ってる
近づけば雨の匂いのするあなた
あなたを忘れるための努力をしていない
ともだちに言わない好きな人のこと
雑踏にまぎれこんでるあたたかさ
ワープロを習うと決めたお正月
手紙出す小さな氷柱あるポスト
原稿用紙買うわたくしはいい女
雨音を聞いて仲よくなる男女
あなたの声がどんどん溜る私の部屋に
待っていてほしいわたしが靴をはくまでは
改札口で小さな別れ繰り返す
うたってあげるあなたの国の子守歌
四日後に逢えるあなたに手紙書く
さっきから空を見上げているふたり
アメ玉ほおばる泣かなくてすむように
お互いの時計見つめる喫茶店
少し欠けた月をあなたと見て帰る
似合うよと言われた服を着てあるく
欠勤届けすらすら書いている女
居酒屋で祝うあなたの誕生日
走ること楽しいと言う好きな人
今度来る電車にふたり乗るつもり

高松市
みとせりつ子

一月の猫道連れにわが流転
だんだら山のだんらの坂よわが生家
母を探しさがし疲れた雪の独楽
最果ては二月の狭き部屋にあり
春蝉を従えてゆく葬の市
土蔵閉じると藁人形の眼が開く
水ぐるま われはこの世の捨て子なん
夢寐に佇つ幼児よとどかざり水明り
凪こほる夢の果てまで朱のランプ
吾子の木を揺らん喝采のなかを
女といふあくなき性を裏がえす
喉ぬめるあまりに桜哄ふので
朧夜の桜(はな)の屍に添い寄れば
擁きあえば死者煌めけりわがさくら
風連れて疾るあてどもなく木馬
乳房あおあおと死を予感せり
斯くて 菜の花 われ狂人の花ごろも
自転車漕ぐ怖ろしきまで昼あかり
階段を駆けのぼりゆく五月の死
夜の噴水に寝返りをうつ幽女の絵
寒寒とうすば蜻蛉棲わせて
灯をともす朝な夕なの指懺悔
死はひそかに竹の柩を編みあぐむ
無縁塚いつかこの身と思ふなり
海に座すまったき時間(とき)といふはなし
秋しぐれ水藻の兄と醒めやらず
兄をいつか壁画に埋めることにする
あざみ剪る指確かなる没落よ
心窩に畳む夕陽と蟷螂と
霜月の海を背負ひし蝶生めり

伊達市
佐藤洋子

けしの花真昼の罪を討てますか
芋の花褒められたくて生きたくて
死に美学あろうか花が降り続く
裏切りのようにも思う花吹雪
花を打ちほとけを打って冬の雨
強がりが過ぎぬかサボテンばかり買う
茫茫とすすき必滅見届ける
向日葵に隠そうとする生年月日
極刑と知るや知らぬや花の白
人恋し恋しほおずき熟れてくる
やがて春許し合ってる水の音
紅引かず今日いちにちを風として
秘めごとのひとつふたつよ春の川
抱くものの儚さ海は蒼きまま
くちびるを通り過ぎてく紙の舟
君の掌のなかの花火はジョーク好き
モノトーンの街でクレヨンばかり買う
ジョークからまだ抜け出せぬ蝸牛
布教師の帽子昨夜のままの月
逃げ道の真ん中へんで書く手紙
雪しきり一夫一婦の箸洗う
天も地も凍る 一語を信じたし
流される覚悟で冬の海と遇う
雪しんしんひとつの乱を埋めるまで
言い切っていつでも死ねるめし茶碗
生よ死よ茶碗にたんと盛る絆
嘘を聞く空がこんなに青いのに
愚者老いるくせ字直らぬまま老いる
視界ゼロ今日の暦がまだ剥げぬ
以下余白ここから広い海になる

愛は幻　ロシアンルーレットはできぬ
さよならの愛を反芻して昏れる
マリアにも然りとて悪女にもなれず
断片のひとつは愛の煉獄で
変幻自在のオンナは直訳に限る
やがて証言台に立つモノクロのさくら
条播きに凝って翔べないヒト人科
アドリブの下手な魔女なら赦そうよ
生煮えの愛を宿して彷徨いぬ
憎の仕舞は花房のひらかぬうちに

東京都

インク壺の波がときどき殺気めく
男女考　春のカギ括弧を捨てる
不毛でも愛は本音で所望する
しおらしいドラマをひとつ切り株に
羽化すれば渇いた海のものがたり
某月某日　憎のほむらを身籠りぬ
騙し絵をひらいてからの静と動
催詩欲雨　愛を鵜呑みにした以後は
眈眈とおんなは愛をまぷたつに
風は妙　手に花ありき海ありき

佐藤　美枝子

月足らずの神話に誰も気がつかず
煙に巻かれる以下同文の羅漢さま
祭り以後　風も次郎も旅立ちぬ
正反合　海は本音をむき出しに
右顧左眄せぬピラニアのルポルタージュ
蓋し妖　蓋し聖なる萎靡の薔薇
ふいに背をはしる私の淫ら火よ
しばらくは媚びる　微罪をのみほして
伏線を張ると媚薬は効きませぬ
無視というかたちで一人殺（や）りました

人生暮色

秋の雷ぱりっと何かが裂けてゆく
イントロが変わり男は首洗う
延々と尻取りをする外は雨
翔びたがる帽子をひとつロッカーに
ゆっくりと秋に傾くミルクティ
老いて行く馬を見ている柿若葉
蟋蟀と押問答などしてみても
木の芽風挑戦状を乗せて来る
縄梯子降りると見えてくる浄土
漆黒の闇でパズルをひとつ解く

仙台市

流行がすり抜けて行く秋の川
夕焼けの空に張り付く生命線
残照の中で転がす舌下錠
痛み激しき漆喰の壁ちちの肩
伏流へ抛りしものに愛その他
剥落の愛を見ている石蕗の花
蛇行する川は負数ばかり抱く
低温火傷　自問自答を繰り返す
水溶液のすこし足りない解放区
解凍はないかも知れぬ花氷

宮本　めぐみ

生き残る順など思うさくらの樹
ムンクが叫ぶわたしが叫ぶ春の闇
柵を切りに来たのは花ばさみ
身のうちの崩れるものへ目を凝らす
煮崩れるものを引き摺る秋の音
ぱりぽりと安定剤を噛み砕く
人生暮色この虹の彩花の彩
たましいが透き通るまで手をかざす
欠番を抱きつづけている夕日
芒野を行く日は秋の面つけて

雪の硬貨晴れる顔してパンを買う
奢るなよ手に一本の傘ひらく
あれは父残雪の山眼に解ける
姉昇天　記憶の砂はきらきら点る
納豆菌おまえに明日の空ありや
白髪梳く川の澱みを汲むように
萬葉の水にも少し唇濡らし
討たれても青い時間を食べて居る
お隣のれんぎょうの黄と立ち話
いちめんに人を許せし芝ざくら

北海道

白い馬にアスパラガスの風送り
黒百合はわたしの影かあなたかも
水芭蕉の一つと契るこのいのち
帽子の中のきらめく海を泳いでは
まぼろしの魚を食べて肥えてくる
炎天や言葉は前を歩き出す
蛍死す月はゆっくり降りてくる
土の香の軍手を雨に干して置く
ひまわりの種父を意識しはじめたな
深爪の喜劇のつづき栗剥いて

桐越　千絵

落ち林檎神と憶しき手のひらに
胸中を吹き抜けてゆく神秘な風よ
飴なめて入れ歯は此岸歩いてる
秋は静かにテロリストの眼灯る
魔かも知れぬ鏡の中に降る雪は
鳩尾の川にぽっかり浮かぶ猫
枕一個水脈走るわが夜明け
誤字正す赤鉛筆に冬銀河
葉牡丹のむらさき遠くなる姉妹
歳月やモノ言う壁になってくる

流氷の一片ずつに骨がある
起きあがるたび流氷は赤くなる
長靴の中流氷の街がある
都市砂漠切られた耳が落ちている
致死量の汗いっぽんの縄となる
柩の中の父に首輪の痕がある
何を見てきたのか母の髪ふぶく
銃口の左右に揺れる影ふたつ
平和論神の座ぶとんかもしれぬ
五十年経て一本の木を倒す

網走市

薔薇散ってイエローカードが届く
あじさいの花影に置く暗証番号
菜の花の海を泳いでいたひとり
あくまでも条理を尽くす立葵
ひまわりに呼びとめられてから迷い
シャワー全開少年鼓笛隊通る
血の色で冬の噴水落下する
まだ揚げぬ花火かぞえて冬の部屋
紙を漉くわたくしを漉く春の水
あるがままのかたちに髪を梳いていく

岩間　トキ

乱数表の中にまぎれているいのち
停まるたび死者積み込んでいく列車
葉ざくらの下でいのちを咀嚼する
空缶を蹴って岬に来てしまう
静脈が騒ぐ告発かもしれぬ
白壁に聞き糺したいことがある
決断ができぬ枕をうらがえす
火を消して余熱の中にいるわたし
赫々と今日のドラマが落ちていく
通過駅石の体臭風の口臭

新緑がせつない君が好きだから
人間の歴史私も参加賞
無私無欲そんな人間らしくない
奪われた自由を祝う披露宴
沸騰寸前私が水であったころ
紅に燃える彼岸の墓である
火種抱えたまま良妻賢母なり
唐辛子たっぷりヒトに飽きている
春雷やふたりに嘘はなかったか
君よ深く私の中へ落ちてこい

水海道市　岡本　恵

冬の次には暖かい春だから
命日に出会う虫ならさあお逃げ
四捨五入すれば幸せ外は雪
相愛の夫婦と思いこんでいる
去る人へ急な未練も春だから
一歳に小さく小さく切るお餅
子の爪を切って何やら大仕事
言葉より重い無言に責められる
越えられる程度の柵を立てておく
贈り物迷う楽しさありがとう
カラットに縁なき日々に光るもの
開かない玉手箱なら持っている
星に手が届いた父の肩車
菜の花の黄色黄色に襲われる
生きてきた証の二ミリ爪を切る
話すことなくて最後の栗をむく
私の骨で作った笛の音
目のさめる時にはそばにいてほしい
二千年私はどんな顔してる
さよならのあとで同時にふり返る

街は陽炎男の尻尾放すまい
赤い花　敷きつめ待つは夢まんじ
わが祭り十指は蝶になる闇よ
真水泥水アダムの骨を洗う音
夢の断層虹の雫を掌に受けよ
花の壺やさしもろしと活けるもの
ピエロ解体なおやわらかな花の降る
虹の衣おんなの衣に風しきり
仮りの世の脱いで纏いて仮りの衣
魔窟洞窟おくへ奥へとわたしの忌

盛岡市　藤村　みどり

祈りつづけて神よりもらうスペアキー
れくいえむまだ降りやまず僕の草原
父の忌よふわり流れてゆく時計
会者定離朝顔ひとつずつ数え
妬心とやいつまでたっても煮えぬ豆
来世での約束はなし合歓の花
生ぬるい影はがしゆく裸身なり
追うて追われて花の階段転がりぬ
甘い水ごくりごくりと騙し合う
滝壺へやがては落ちる炎の枕
ひかりまさぐってひかりになった花
終点の駅で開けよう虹の箱
悪女志願書　うすももいろのペンで書く
人脈水脈ぐぐっと飲み込む命かな
迎合よ滴り落ちるものもあり
むかしむかし男の首を食べました
いとあざやかな裏切りとあう小さき輪
金魚掬いの紙の輪上で踊るなり
キリストを直視できない時もある
自虐諧謔わが痩身の果てるまで

いつだってにぎやかなのは坂の上
坂の上に犬がいて僕は二十歳だった
ちちははの円を抜け出す葱ぼうず
シャボン玉越えてみようか父の屋根
ハリネズミ僕は自分も守れない
脚を擦る縄は私を認めてる
一日の重さが違う目をしている
その掌から暖色系の風もらう
みんな優しい僕の奥歯にある砂漠
空き缶をペコンペコンと眉の雲

青森県　福井　文明

ざわめいているのは魚の記憶か　波
僕が居て幾人旅に病むのだろう
咲けば散る咲かねば朽ちるもういいかい
波激し　君よ浜辺に立ちたまえ
両手広げて僕が受け止められること
手招きを繰り返しても干物の眼
団栗ひとつ転げて行った夏の岸
青空へバスが消えてく夏の章
陽炎の形で君のバスが行く
青空のかけらを戻す画布がない
青い実を一つ流して秋の眉
脱皮する蛇に見返る事はない
涙して月を見た人通りゃんせ
丸描いて私ひとりのかくれんぼ
遠景に花野ぼそぼそ飯を喰う
迷蝶の死骸　笑って死ねますか
終わりのない悲しみならば包まれよう
だぶだぶの袖口ジョークみたいにさ
なあんにも出せぬ帽子でいいじゃない
海光る思い込みでも朧でも

樹齢千年人の戦が終わらない
錯覚という春の野に立ち尽くす
紫の音が砕けて風に散る
どの道も門を閉ざしたまま暮るる
草茫茫白い視線と交り合う
胸の海石投げられて波打つよ
流れない川に終桜が吹雪く
決められた道しか行けぬ背番号
笑うこと余儀無くされて岸伝い
瞳の温み怖くてすくと立ち上がる

青森市　福井　陽雪

手を打てば僕がどんどん遠くなる
さまざまな鬼握り飯から溢れ
魂は売らぬ売らぬと深い赤
蝉になら見せられそうな胸の傷
ストローを詰まらせている死の話
神になるああ切れそうなピアノ線
柩打つ音の如きに躓けり
紫陽花無残裏と表を見せながら
薄明かりブランコはまだ揺れている
これしきのことだったのか満月よ
なぞなぞを解くと激しい雪になる
火の記憶ぐるぐる回る闇枕
存在を問えば一面滝の音
体内の魚一時に遡る
雪闇のはるかはるかに鼓笛隊
曲がり曲がって僕の所に来る光
目覚めたる馬月光を攀じ登る
命燦燦輝いている闇夜
妻も私も夜明けの白に跪く
人間の形がおぼろげに見える

多摩市　鈴木恒子

踏絵から重たい鍵を渡される
ふるさとの巷で羊水に浮かび
続編に錆びた鎖がついて来る
伏線の川から拾うキーワード
自分史の伏せ字に溜まる綿ぼこり
好奇心失せて毛穴のない手足
自画像の消えゆく赤を抱きしめる
気がつけば背中合わせに漕いだ舟
川幅を知って畳んだ虹の橋
お座なりの囃子に酔えぬゴムの伸び
人形に指紋が出来て疎まれる
マニキュアの赤ふるさとを塗り潰す
バイブルの鎖が重い薬ゆび
眼を閉じて一番好きな色を視る
てのひらを修羅と菩薩の血が閲ぐ
噴水の真下に立って水を乞う
とろとろと私を煮込む仕舞風呂
病む川に祈りの杭を打ちつづけ
妬心の刃鏡の裏を透かし彫り
疑問符に堰き止められる胸の川
猫ほどの額であったわが宇宙
過去形の皿に盛れない桜餅
風歇んで風鈴の音聞こえ出す
幸せの揺れの戻りの灰かぐら
助走路で真水が尽きる千羽鶴
飛び降りて深さを覚るわだかまり
冷え性の変換キイに弾かれる
身のほどの天も地もある壺の中
マンネリの吐息を溜めた足の爪
脳底に四角四面の覗き窓

福島市　西海枝（さいかち）みちこ

もひとりのわたしを探す午後の駅
はじまりはうす紅色の花に酔う
体温で咲くまで待っているさくら
てのひらに春の匂いがよみがえる
ふんわりと別れ微熱の中に居る
崩れゆく想いをたたむ薔薇の影
待ちつづけやがてうなじに蛍棲む
髪切って雪の白さを確かめる
まだ何かあっていいはず窓を拭く
掌に残るレモンの重さなんだろう
胸中に風船売りの影を見る
海を見ている人の匂いの消えるまで
無言劇鈍い光を溜めている
能面を洗いつづける沼の底
自問自答すくっとひとり冬の月
人間に戻るみそぎの面を彫る
輪の中で同化してゆく戦いながら
やがて来る冬の重さを掌に受けて
淋しさの真ん中童女の影を置く
まなうらに眠る小さな石仏
もみじの手不意に遠のく欠け仏
追いつめてゆく空っぽなおもちゃ箱
雨音が玩具売場に激しくて
目も耳も萎えたわたしの寒い椅子
傷口を包む寡黙な母子草
最後までひきずるだろう子の温み
灯明の揺れるあたりで生きようか
向き合うてやがて広がる陽の匂い
生も死もまぁるく見える日昏れ坂
歳月が育てつづけた午後の虹

守山市　徳永政二

机の下に大きな桃がなっている
働く足と働く足をからませる
また一羽おんなじように飛んでゆく
消えてから少しの間あたたかい
反対の言葉探しているコート
秋の風家族の名前書いている
花びらは五枚手口は巧妙に
なめ上女の口が飛んでいる
することがないので鈴の中のぞく
どれほどの欲であろうか蛇動く
何人か通ると消える虹の門
標札の裏で卵を産んでいる
仏壇の奥まで見せる仏壇屋
アイロンをひっくり返しているおばけ
うっかりとみかんの皮になっている
動物園の一番奥に象がいる
神さまの昨日の水を捨てている
どうしても顔のところを見てしまう
間違ってたのんだものを食べている
たいやきのしっぽを落とす草の上
ありがとうございましたと母の下駄
中心がひっくり返る煮えている
やぎのようにひつじのように貰う金
米粒を中途半端に噛んでいる
ゆっくりと流れ岸辺にひっかかる
時計から見えないように立っている
消毒のにおいをさせている電車
静かにしていようもうすぐ終るから
母がくる黄色い花が咲いている
深い深いところでいなくなっている

小樽市　斎藤はる香

炎を分けて友よ生きろよ睦月の乱
生と死のはざまを照らす冬の月
姉は猫抱き混沌とした瓦礫
行方知れずが燻る街に冬空に
地の怒り友もくぎ煮も風さらし
身のうちに溢れる哀よ妹よ
一宿一飯風の情けを折りたたむ
波濤千里かさねてうねる傷ときず
天変地異　喪服の街は遠い海鳴り
訣別の揺らりゆらりと水の画布
葬式を済ませた　冬の表札
女系家族　家紋を抱いて修羅抱いて
電話きるみぞれ混じりの雨を切る
喪が明けて姉の帯から蝶が翔つ
芒野夕暮れおなじ痛みの姉いもうと
いつ解ける枷か港も夕焼ける
親越えた子の水甕を売りに出す
娘もいつか母の寒さを着るだろう
母でありたし一匙ずつの塩加減
春の音母に波立つ日の多き
鱗おとして水草の母となり
透明になるまで磨く負の部分
慰めはビールの泡の四面楚歌
この街をいつかは出ようガラス雛
明治が流れて逝く運河曇天
まぼろしの鳥かもしれぬ運河の艀
火の鳥の卵ひとつを抱く薄日
逃げ水を追うて追われて花いくさ
人逝けり彼岸此岸の灯の翳
筆折ってひとりの森に冬が来る

すすき野の風にあずける委任状
わたしの中の円空仏が眠らせぬ
背景の竹の理念に負けている
鬼は寝たかキツネ覚めたか冬銀河
自画像におとぎ噺をもう一度
おしゃべりなトイレの壁の星野富弘
冬の鯉うごかず長い文になる
夕やけに母をのこしてバスは定刻
羅生門この世の側に散るさくら
人妻の枠をいっぽんずつはずす

老杉に汗泛く冬のかたちなのに
厄除橋渡る静かに闇はじまる
よく笑う姉の背中の傷ひとつ
泣き場所を荒していったのは女
小町盲いて竹林の雨聴いている
企みが肥る雨音激し夜は
傷ついた欅を抱いて温める
空白の日記帳から火の匂い
流氷始まる硝子の馬は眠そうに
風花のひとひらごとにいる仏

福岡県

背伸びして歩く　何でもないように
ある日突然野性に戻る指ぎつね
椅子のくぼみに男ひとりの海がある
蜘蛛の糸光る　いのちの臨界に
指笛は遠い日のものマルクス忌
きりぎりすこの世を語りつくせたか
火柱になるかも知れぬ不整脈
わたくしの闇に捧げる子守唄
平成のゴッホ　ラーメン食べている
裏木戸をときどき叩く風ほとけ

長井　すみ子

金魚鉢から覗くわたしの二十四時
バイブルも帽子の鳩も　行方不明
いい人に出逢えましたかカブト虫
水乞いのかたちよ影も　梔子も
猫とめし分けてついでに生きている
ほとけ一体うまれる　雪の顛末に
愛ですか戯れですか　月の笛
裏口を白い柩は出て行った
耳の奥昭和の海が鳴りやまぬ
紙人形の朱唇どこまで赦せるか

高槻市

紫陽花の身の上ばなしはいつも飛躍
男の腕をするりと抜ける花氷
蝶追うて春の階段ふみはずす
三角の涙と流れていくピエロ
おんな独りの部屋で耳ばかりが伸びる
シャガールを食べつくし夏の体温
一夏の嘘が落ちてる交叉点
火の酒を満す壺は生き返る
蝶図鑑　柩の母に添い寝する
水鏡　鷺の愁いも多色刷り

笠嶋　恵美子

喜劇終って重いテーマが胃に降りる
青春の余白にリリーマルレーン
耳鳴りが続くひとりの死を思う
怨の字を呑んでくちなわ透明に
焼け跡に佇つ音の無い古時計
おんなひとり写楽の顔と飲みあかす
冬の森に円周率がとぐろ巻く
鍵盤を滑る指から炎立つ
おんなが女を追い抜く寒い階段
歳月や父の背骨を蝕んで

言い訳けもせず死んでいく蔓の先
泣きべそをかいてる種をてのひらに
くらがりでのびのびしてる春の皺
こなごなになって温そうな土塀
桃色になりたくてころがるラムネの玉
無造作な夜景に潜む爬虫類
春愁の空から劣化する音楽
ひび割れが臍のまわりに寄ってくる
笑い乍ら森を出る泥水
ガサガサと耳に入ってくる尻尾

幸せは孫とメロンが食べられる
老いて来た証拠に溜まる句読点
音消えて闇に目が慣れ釈迦と居る
軽い口吐いて大臣棒に振り
戦争の話尽きなく共に老い
石を蹴る私一人が喪に服す
逆転のチャンスもなくてたそがれる
妥協した指十本が眠くなり
自慢した足だが亀に追い越され
まだまだと八十路が土に流す汗

東京都

千切れそうな首が見ている遠花火
てのひらの妹がふっと居なくなる
ジャガ芋一つころがりあいつ死んだ
白い眼の中に敷いてある新聞紙
半熟妻脳の間を歩いてくる
一字ずつ拾って歩く殺風景
少年が耳から死んでいく真昼
一つは哀しく一つは憎い花火
哀しみがひゅるひゅる通る落葉樹
水灯し蛍が測る水の距離

山本　忠次郎

読み人知らずいじめだったかも知れず
合わせ鏡で母の雪崩をみる
真人間になるうすむらさきの花火
壁に毛が生え少年ほころびる
蓑虫のように老年ぬくもれず
目の奥の嵐がやんで軽い脳
濡れた部分を乾かす精神文化
頭骸骨の階段を上る靴音
新しい箱がぐうぐう眠る晴れ続き
やわらかい鐘を撞いてる思慕のなか

遠野市

土と生き土となる日へ今日の汗
見られたくない日記でも今日も書き
雪消えた去年の田圃見て廻り
長生きの証拠外米二度も食い
簡単に辞める総理はやはり殿
借衣装脱げば貧しさだけ残り
北国の無口つららが太くなる
何事もなかったように田が眠る
運のない奴がかかったネズミ捕り
激戦の果て一票で泣き笑い

鈴木　南水

冷害の田圃農夫も冬ごもり
漢方の秘訣を祖母が知っていた
どこにでも一風変った奴が居る
隠し芸終ってむなしい風に会い
手心が汚職政治を産み続け
出稼ぎを見送るつらら太くなる
地酒から聞こえて来ます春の唄
よく耐えてくれた野菜に春が来た
悪友が一本提げて雪見酒
回復の兆しが見えぬ我が家計

東京都　島田小吉

旧友と語れば回る走馬燈
灰にした古書への熱がなお冷めず
男なら灰になるまで好奇心
花束を抱いて定年照れている
人生の旅路片道切符持ち
幸せは小事にありとペンを擱く
鉄拳で叩き込まれた正義感
屈辱が握り拳の中にある
時代への呻き声聞く伏字本
聖域に因習の鬼棲み続け
自分史にブランクがある戦中派
死神がじゃんけん挑むガン告知
分け入った言葉の森で行き暮れる
風化する戦の話流れ星
束の間の平和が燃える聖火台
滾る血は親父譲りの一本気
気の置けぬ友へ言葉は要らぬ酒
青春を漁り歩いた古書の街
じゃんけんで手軽に決まる運不運
日記帳余白残さぬ不眠症
十代の夢は車輪の下に果て
色眼鏡捨てれば奥の奥が見え
歌麿と写楽が競う江戸の色
炎天下玉音の語尾燃え尽きず
断ち切って見えぬ鎖に縛られる
カラオケの陰で戦の歌眠る
末席に座して男の笛を吹く
初孫の小指の爪にある輪廻
散らばった星を結んで描くロマン
駆けつけた通夜でまとまるクラス会

仙台市　庄子喜一

かすかなる脈よ脳死は信じない
せりに出すその日は牛の瞳を見ない
裏切らぬ心ひとつを誇りとす
バブルからまだ温めてる無精卵
ひたすらな風に大地は妊りぬ
うぐいすを聞いて予感が走り出す
春うらら溜り出してる請求書
抵抗の鉾先にある余命表
陽が昇る昨日の荷物背負い直す
鼻の穴ぴくりと嘘が剥げている
民営となれば俄に句読点
あきらめに変る美徳を持ちつづけ
ふと郷愁駆けて行く子のランドセル
献血の列で大人になっている
外来で本音噺を聴いている
方言でどなって夫婦らしくなり
泣いてすむ口惜しさならばそれもよし
火消壺のぞけば愛のミイラたち
野良猫よこの頃毛艶が立派だな
フォーカスのカメラは夜勤病となる
米騒動心の飢えを見て歩く
充ち足りた眠り真珠は貝を出る
雑音にされ情状は萎えてゆく
精一ぱい生きて神様ほとけ様
裏糸を頼る華麗な錦織
責任を問われ私は世帯主
サイコロは今日も理想の目とならず
喰べるだけあればいさかいなどいらぬ
道化ても真面目ごっこがついて来る
亡夫の年齢まではまだまだ誕生日

砂川市　大橋政良

ひまわりが黒く描かれている童画
仕返しを考えている冬の蝿
雑兵という哲学を持っている
風の駅影と別れて影と逢う
引き潮の藁一本と野に下る
一期一会互に見てる冬景色
笑い話をみんな忘れた冬の海
人混みで嘘のまじった咳をする
静と動尻尾を二つ持っている
一椀の粥一椀の飢がある
三球三振何かがとおり過ぎてゆく
指切りの指を花粉で偽装する
凪ばかりとは限らないハガキ来る
当落のきまる真っ白な一日
尖端に殺意をためている氷柱
ガラス戸に写したなにげない私
人間の皮をカタログからさがす
札束の好きなコブラを飼っている
火の匂い風の匂いのある柩
酔うて候どの向日葵も夢がある
臍の緒がきれて小さな駅になる
テレホンカードの穴からジャズを聞いている
糸を切るこれしか凧を救えない
樹をゆする手にわくら葉がひいふうみ
ポックリ死こんな見せ場を神がくれ
履歴書の汚れぬ程に嘘をつく
消壺で出番の来ない炭になる
太らせてしまった嘘に食べられる
悪人になれぬ半端な顔洗う
何もない一日　平凡な堕落

高知市　北村泰章

もう一度生きてみようか水の音
水飢饉水の恐さを手に享ける
想い出の川が氾濫して困る
水時計濁った水であろうとも
水涸れてからくり人形の昼寝
水中花ある日匂いがほしくなる
泥水を飲む少年の一途さよ
水鏡に腑抜けな貌を見てもらう
一滴の水に疑問は持たないか
水草や人間臭い貌になる
忘れたき人あり橋を長くする
男の牙をてのひらで転がせる
カードを食べると言葉が分る送信機
櫛の歯が折れて男が一人死ぬ
幻の海で吠えたくなる遺骨
あれは劇だったか　たましいが手に残る
トマト潰して鬼一匹を葬りぬ
宝箱に宝があって鬱になる
ピノキオの鼻は誇りに満ちている
稜線に立つ　猪の眼になって
おのが影に怯えつづける手負い猪（じし）
手負い猪（じし）の脳髄を流れゆく音楽
山紫水明　傷口が深くなる
母の眼の高さで育つりんごの木
青溲瓶病母（はは）の性器を見ていたり
もひとりの僕が生まれる病母（はは）の指
空一面に髪を垂らして蛍逝く
地の底で光りはじめた母の櫛
いつもの位置に父の帽子が掛けてある
父の一生はチョロチョロチョロと燃えただけ

自分の声で自分を唄い〈現在〉を呼吸する川柳を

吉田健治

二回目の銓衡です。一回目の銓衡では原稿の量と個々の作家の放つ熱量に圧倒されて自分を見失いがちになりましたが、今回は比較的冷静に、客観的に、選が出来たようです。

前回の尾藤三一柳氏の評言に全く共鳴して、私もやはり銓衡の基準を個性とオリジナリティに置き、作者の顔の見える作品を選ぶよう心掛けました。

特選　渡辺和尾

平明にして深い作品を目指している作家に思われます。「緑」の編集長として大集団を率い指導しながら尚もZ賞へ応募するという姿勢、意欲を買います。

・水を飲むまもなく雨季のコツンと音
・浮いているだけの雲だと見ていたり
・人間という生きものに穴を掘る
・かざしもの町に着くころ丸はだか

一見弱いようで海月のように浮いているように見えていて、芯の強い、したたかな作者です。強烈な個性を発散していなくても〈普通〉の勁さ、を見せる作家です。更なる深化を期待しています。

秀逸①　樋口由紀子

女性作家には珍らしく情に溺れず〈知〉の働きかけで句作している作家です。作品もステロタイプを廃し新しいテーマを次々と掘り起こしている作家です。やや生硬さはあるがそれが身上とも言えます。

・銀紙を剥せば一方通行の道路
・自己否定沖に鯨がいるようで
・水底にロバのパン屋はやってくる

秀逸②　なかはられいこ

・空に満月ぞくぞく届く不燃物
・待ちあぐむ卵一個の静謐を
・おちばする五臓六腑をひらききり

豊かな感性を持ち〈知と情〉がほどよくマッチして、上手さも持ち合せ、〈現在〉を呼吸しています。2句目は拙作に〈しゃぶしゃぶや牛のいのちの静謐に〉がありますが、〈静謐〉という難しい単語を、主婦の眼で、見事に作品化しています。

秀逸③　菊地俊太郎

・市民ランナーのしたたかなメーキャップ
・ラッシュアワー窓に無数の梟の眼
・ひとり旅の果てに覚えた止血術

現代川柳の系譜、中村冨二、奥室数市に次ぐ席を持つ者と私は考えています。辛口で抑制が利き、や丶ブッキラボーですが明日の川柳を担う作家であります。都会派です。

結論として、口当りのいい耳に心地良い流れるような作品や文語、や丶かなを使った作品は出来るだけ外しました。

やはり〈現在〉を狙い撃ちした作家を選びました。

高橋真紀作品は一服の清涼剤であったことを申し添えます。左は選外佳作。

おひさまが波のぴあのを弾きにくる　高橋真紀
吹き荒ぶ羯諦を行く樵の子よ　岩崎眞里子
水墨画あなたは何処に血を売りに　秋元深雪
全身を踏んで行く秋の葬列　万迷多
てのひらを修羅と菩薩の血が閲ぐ　鈴木恒子
キリコガラスの空にピッコロ吹きがいる　横村華乱

選後感

八坂俊生

特選に坂東乃理子、秀逸三人に梅崎流青、鷲谷美津子、倉富洋子の順で選んだ。これを書家である女性に読んでもらった。「川柳もその人間が出るんですねえ。恐いですねえ」と彼女は言った。

ということは、この四人の作品には作者という人間がはっきりと出ているということであり、私は安堵した。彼女は「川柳も」と言っている、書も同じだと考えているからだ。その彼女が人間が出ているというのだから、これでよかったと思ったのである。「恐いですねえ」というのは、自分を曝け出すことになるのが恐いのではなく、自分はこれだけの人間だと開き直らねばならないことのつらさであろう。曝け出すのが恐いのでは書も川柳も書けない。

坂東乃理子の作品は、普通の言葉で書かれている。その普通の言葉が詩の言葉になっているのが素晴らしい。詩は特別の言葉を使わなくても成立するのだ。日常生活の中での発見が生き生きと表現されて坂東乃理子という人間を浮き彫りにしている。

梅崎流青の作品は、人生の悲哀が迫力をもって迫ってくる。作品の言葉の持つ重さは取りも直さず作者の思いの重さであろう。赤黒い情熱が漲っている作品群である。

鷲谷美津子の作品は、平凡な普通の女を思わせる。夫婦と小さい子供のいる家庭の生活の匂いがある。平均的な市民の日常の一齣一齣が浮かび上がってくる。

倉富洋子の作品は、感性が前面に出ている。「どういうこと？」と問われると、説明に苦しむ句があるけれども、それも分からないというのではない。分かるのだけれども説明は出来ないという性質のものである。それは読者の感性で感得するしかない。倉富洋子にとっては自分の心こそが問題なのだ。

以下心に残った句を一人一句ずつ挙げておく。

夕焼けに向かって少し前のめり　峯裕見子
鉄拳で叩き込まれた正義感　島田小吉
ゆびきつね 今日はあなたの胸の位置　あべ和香
生きてきた証の二ミリ爪を切る　岡本恵
朝がくるたびに女になっている　笹田かなえ
死ねそうな今朝の洗面器の深さ　矢島玖美子
原色の自転車がある妻の秋　樋口仁
借衣装脱げば貧しさだけ残り　鈴木南水
岬には野の馬がいる朝の椅子　なかはられいこ
せりに出すその日は牛の瞳を見ない　庄子喜一
複数の淋しさがある丸い爪　樋口由紀子
ライバルが先に来ていた水飲み場　神谷三八朗
もう一度生きてみようか水の音　北村泰章
少年に帰ってゆける水枕　戎修
ふだん着の神にだあれもきづかない　宮村玉
雪しきり一夫一婦の箸洗う　佐藤洋子

空足をふんで真昼につき当る
ハムレットにゆっくり伸びる老いの影
傾ぐ煙突　正義の使者は遅刻がち
半眼の視野にうっすらと極楽
桃源をあるきさびしい嘘をつく
神様にすこし近づくぽかん釣り
日に一度灯りがともる秘密の通路
論理から詩への途上に笑い猫
素潜りの肺に時間という魔物
月下たたらを踏んで墨絵の魚

(38頁下段よりつづく)のことを書いたが、こんなにさりげないかたちで、私の思い込みに一撃を加えられるとは思ってもいなかった。

右の作品を含めた今回の三十章は、すべてが揃っているというわけではないが、ひとつひとつの風景が、月下の「半面美人」に魅きつけられるような蠱惑的なたたずまいを見せている。

彼女の作品は、おおむね横顔だけが明るみにあって、その向こうにはシルエットとしてしかとらえられないが、それもくろぐろとした影ではない。見れば見えそうなおぼろな輪郭が、全体の風景を支えている。計算された機械的な明暗ではない、作者の内なる不定形な明暗が、そのままの形で「吹き出し」のように、ふわりと置かれている、そんな印象を受ける。

彼女には、技術的にこれ以上巧者になってほしくない──それを、ほめ言葉代わりのはなむけとしたい。

他の入賞者に言及できなかった選者としての怠慢を、私の推薦したすべての作家にお詫びする。

市川市　普川素床

シレーヌの鱗に夜と昼が棲む
花を欲しがるモノクロの水子たち
春の陽が点火しそうにマッチ箱
遅れがちな時計にユーモア賞をやる
枯れた童話を春風がめくる
夕暮れの背中に孫の手が届く
目を瞑る佛像西の空が切れ
ゆれるブランコ　雌猫の目のリアリティー
昼の火事むかしのぼくが燃えている
嬉しそうにぼくが倒れている枯野
テルテル坊主が体操するぼくの誕生日
切れば血の出る平和を抱きしめる
ウォーターシュートが爆ぜる家族の個々
視野を変えれば霊柩車もひとつの音楽
一人を救い二人を沈め砂糖水
はらわたなどもとより無し　椿の落下
二度三度逆立をして方向音痴
自由律夜は故里が恋しくなる
葱きざむ音残照を味方とす
墓に近づく　告白はまだ半裸

選を終えて

桑野晶子

「あなたは文明に麻痺していませんか」この一行を目にして、身を整される思いがした。脚本家、倉本聡氏の言葉である。

奢り闌ける文明には、必ずや麻痺が起きる、川柳の世界も決して他人事ではない。例えば限りなく膨れ上ってくる作品の趣向に、麻痺症状が拡がっていないだろうか。

特選　渡辺和尾

やわらかいもの足もとの緑の草
人間という生きものに穴を掘る
どこへ逃げようか朝顔が咲いている

傲らず昂らず、その爽やかなもの言いは、渡辺和尾さんの志、それでいて作品の根っ子は揺ぎない知的な人生観が漲っている。三十章を読み終えた時、作品たちが、顔上げて真っ直ぐ歩いてくるような感じがした。それは自分の川柳を書き切った作者の飄飄とした像であった。

秀逸　樋口由紀子

満月や金魚を深く地に埋める
水底にロバのパン屋はやってくる
透明な波が来るまで肉体労働

日常的な時間や空間の常識から脱出する感覚を捉えるという和田悟朗氏の一句を挙げてみよう。〈春の家裏から押せば倒れけり〉樋口作品を知った頃、和田氏の直感的表現に近い作家のように思ったが、端正に束ねられた三十句の趣意に、やはりと思う。野を渡るような青い風を送ってくれる作家。

秀逸　伊藤紀子

霧が生まれて水想劇場開演す
水際のポストへ通う尾のない魚
朝のパン抱きしめもどる水の村

辞令一本の旅を続けている抒情作家。厳冬も凍ることのない美しい洞爺湖との明け暮れ、その大自然に、生を、性を晒しての一句一想は磁場の勁さが宿る。湖を愛する作者の志に、水は水の言葉を結んで還ってくる。

秀逸　前原勝郎

生は死の一部でありし夏椿
藪椿かなしみぽっと微笑せり
微熱止まぬ頭の中白くなりにけり

淀みなく三十章を読み通させる音感に驚いた。加えて研ぎ澄まされた光と影の交響、作者の事問いは、その波に乗って始まる。あたりを包む哀愁の渦、勝郎作品から思ってもいなかった一つのステージがせり上ってくる。感動の春宵であった。

。。

画家の名を聞いて額縁を決める　柿木英一
花を打ちほとけを打って冬の雨　佐藤洋子
雑学の最たるものに理髪店　山本礫
みんな優しい僕の奥歯にある砂漠　福井文明
長靴の中流氷の街がある　岩間トキ
訣別の揺らりゆらりと水の画布　斎藤はる香
青溲瓶病母の性器を見ていたり　北村泰章
晴れた日のこっぱみじんの黄色です　広瀬ちえみ
ラッシュアワー窓に無数の梟の眼　菊地俊太郎
引き潮の藁一本と野に下る　大橋政良
硝子細工の毀れ易きをいのちとす　松田悦子

言葉に冒険を

岡田俊介

今年度も、内容、表現、さらに作家の独自性を考慮にいれ、作品の印象を大切にしながら選考した。

佳作の多い野沢省悟さんを特選にし、安定した力量を見せた前原勝郎さん、樋口由紀子さん、それに独自性を貫いている大谷晋一郎さんを秀逸に選んだ。

応募作家の作品は、それぞれが力作であり、それぞれに人生があった。秀逸との僅かな違いは、作家精神の柔軟性にあり、作品のフレキシビリティ、しなやかさが選考の分かれ目になったように思われる。一端として言葉の冒険、一歩踏み出し、一歩先にある言葉を刈り取るという言葉の冒険を望みたい。作家の感性によってコントロールされた言葉であれば、遠い言葉ほど衝撃の効果は大きい。

野沢省悟さんの作品は、着崩れしていない文体の深い味わいがあった。雪をとおしてみる墨絵の世界であり、日常の隅々まで雪が重奏して舞うさまを実に鮮明に描き、印象に訴える作品を得ている。「フォークの尖端に散るささめ雪」など泣きたいほどの寒さがある。刃物のきらめきをもつ雪を描いて、雪国の人ならではのものがある。

前原勝郎さんの作品は、生と死の間にゆれる自分を描いていて、純真さゆえの美しさをみせている。比較的波の少ない安定した表現の中に、冗長と思える作品が見られるのは、下五の扱いのせいであろう。最も、そこに作家性があるのは否めない。

樋口由紀子さんの作品は、一呼吸で読める内容にパッケージ化されていて、そのパッケージの中に、少しのウィットと明るさと意外性とを同居させている。とくに意外性がこの作家の持味のようである。日常を切り取ってパッケージ化し、結果として新しいスタイルを築いている。作品の安定度から秀逸にした。

大谷晋一郎さんの作品は、決して粒ぞろいとは言えないが、いくつかの佳句が印象に残った。「草を負う背な」の作品など、幽玄と現実とが織重なる自分の世界、一度自分の体内に引き寄せ、そこから吐き出して、広がる世界を描いている。

以下、感銘を受けた作品を挙げる。

魂をそれたらしい青林檎のナイフ　本多　洋子
どこへ逃げようか朝顔が咲いている　渡辺　和尾
桃色になりたくてころがるラムネの玉　山本忠次郎
何を見てきたのか母の髪ふぶく　岩間　トキ
母の沖ぽっと灯のつく合歓の花　伊藤　紀子
まぼろしの鳥かもしれぬ運河曇天　斎藤はる香
樹の燃える匂いを髪につけたまま　峯　裕見子
ラッシュアワー窓に無数の梟の眼　菊地俊太郎

選後に乾坤一擲

寺尾俊平

去年のZ賞候補作品の銓衡を終了したとき、今回で一時終了したい云々とあり、なにかしらの解放感と一抹の寂しさが同時に襲って来たのを記憶している。そしてまたこのZ賞が復活したとき、真成に一擲して乾坤（天と地）を賭ける。という言葉を思いだした。これは韓愈の詩の一節であるが、とにかく大バクチをやるということらしい。李白の詩にもこんな言葉がある。天地一擲に賭す。いずれも大袈裟な詩であるが、このZ賞を再開した草兵君の気持ちを思うとき、ふっとそんな気がしてならなかった。とにかく続けて呉れるというのは嬉しい。したがって今回の選はなにかしら、辛夷の白い花が咲きこぼれるような風景の感慨で選を始めそして終了した。

特選の渡辺和尾の作品は決して絢爛たる作品群ではないが、彼の真摯な川柳体験の表現がしみじみと迫ってくる。

和尾の次の作品は呟きの美学を感じる。

透明な澄明なほとんど皆無の闇へ
頽廃の香り懐かしモカを飲む

秀作1に柴崎昭雄を推す。彼の境遇は私の友の細川不凍君に似る。しかし不凍君より幸せなことに父君、母君がいらっしゃる。嫋々たる父君、母君への思いの心の歌は深い。

ほろほろと父かげろうの駅に立つ

秀作2になかはられいこを挙げる。彼女の持つ繊細な情感は、北の大地に紫の褥を敷くラベンダーの花を思わしむ。この個性を大切にゆっくりゆっくり、作品を彩って貰いたい。

くちびるがいちばん昏くなる真昼

秀作3はためらいなく梅崎流青である。男っぽくて、少し以上の野暮天の彼の作品は限りない草の匂いのような魅力を感じてならない。これから先の展開を楽しみたい。

ひかり溢れ牛まっすぐに歩けない

アドリブの下手な魔女なら許そうよ　佐藤　美枝子
嫋々と影曳く枯野みちづれに　前原　勝郎
秋風に親指で消す父の国　樋口　由紀子
転生や赤い鼻緒は地を這えり　板東　弘子
傷口を開いて見れば外れくじ　樋口　仁
最初から煙のようなものだった　吉田　三千子
子の背なに指ピストルが浮きあがる　岩崎　眞里子
痛み激しき漆喰の壁ちちの肩　宮本　めぐみ
消毒班がふりまいてゆく単語　菊地　俊太郎
影を拾った白鳥が去る鏡の空　野沢　省悟

以上、佳作十氏の作品のみを抽出したが、これから先に考えないといけないことに、個性の確立の再認識がある。今回はそのことに拘って作品と対峙した。諸君の健闘を祈る。

自己世界への発掘

佐藤岳俊

Z賞選考への歩は胃の痛む思いである。冬木立の裸体が、血を得た人間のごとく、やわらかい芽を天に向かって伸ばす五月、その雑木林で、川柳作品に自らをさらけ、苦悶する光景に触れた。

特選　西　秋　忠兵衛

○実存やたとえば洗面器の深さ
○農夫も俺も耕しているともかく
○ケロイドの下を流れる五十年
○自転車の背に山積みの妻子かな
○牙は象をわすれてしまう改憲論

現実を掴むグローブをたずさえている。そして自己の掘り進む世界をしかと定めながらも、批判精神を失っていない。いつも動きながら、過去・現在・未来を身体でとらえようとしている。諷刺の風が流れていた。

秀逸①　柴崎昭雄

○腹這いのあとのかすかなけもの臭
○目ざめてはもろく笑えり影法師
○おろかなる魚影曳いて蒼き祭りに
○笑い袋の笑いあぐねる月明かり

自己の世界からはじける作品である。生き方を失った作品はつまらないが、この生き方を自分の世界へたぐり寄せ、うす暗さから明るさへ向かって必死で歩む力を感じた。

秀逸②　広瀬ちえみ

○眉を描く水はあふれるほど満ちて
○糸をぴんと張って一日中走る
○ガラス箱に閉じこめられている叫び
○雨になるフランシーヌが降りる駅

一心不乱に走りつづけ、その鼓動の中から感性が湧水のごとくあふれている。静と動、明と暗の世界をふくらませて、ぎりぎりの女の声を圧縮させている。

秀逸③　笹田かなえ

○深い赤憎んで憎み切れぬまま
○ゆりかごにゆれるわたしをもっとゆらして
○栗の花匂えば栗の花さがす

女の持つ性の渕をゆっくり歩いている。性は天から与えられた本質なのだが、個性の頑固さを時に激しく又静かに息づかせている。

総じて自己のテーマを持った作品が少なくテーマがあっても燃焼していない作品が多かった。川柳はだれのためでもなく、自己のために創作するのだが、諷刺精神やアイロニーを失っているものは、私の目から遠かった。

自己の世界をどこまでも発掘してほしい。

佳作の中から心に残った作品を掲げる。

なんだろうこの寂しさは芋の泥　秋元　深雪
北窓の蜘蛛よおまえも寂しいか　あべ　和香
むかしむかし男の首を食べました　藤村　みどり
蛇行する川は負数ばかり抱く　宮本　めぐみ
亡夫の木椅子に躓く様を見ていたか　板東　弘子
さよならの愛を反芻して昏れる　佐藤　美枝子
抱擁の視野いちめんに跳ねる魚　倉富　洋子
雨だれを数えるだけの平和論　松本　幸夫
頽廃の香り懐かしモカを飲む　渡辺　和尾
裏切りのようにも思う花吹雪　佐藤　洋子
髪切って雪の白さを確かめる　西海枝　みちこ
持ちあぐむ卵一個の静謐を　なかはられいこ

言葉とこころ　その調和が個性となるとき

橘高薫風

作品の韜晦ということに関して従来から言われる伝統派の一部固陋な柳人だけでなく近来革新派のベテランにも孤高独善を固執するきらいが顕著になったように思える。今迄にZ賞を獲得した個性的な作家が賞を得たあと作品の提出がないのでおいおい寂しくなり応募句は平均して小粒になってきた。

秋元　深雪

土器の前わたしの匂い強くなる
烏賊釣りの灯が逃げて行く腕の中
涅槃図に加える夫冬の猫

澄んだ感性を生かして作者の生き身が強く感じられる句であるのは、作句に対する自身の傾倒ぶりを思わせられる。

六条の御息所　寒椿

も目に立つ句だ。

西　秋　忠兵衛

水掻きを見せて改札口を出る
堕落論　沖の夏雲うつくしい
血脈をくだるポンポン蒸気かな

この作者の句は川柳のたのしさを一番強く伝えてくれる。深刻を深刻ぶらず、ユーモアに媚びることもない。

小春日の岩波さんの国語かな
日本海の波をかぞえる母をかぞえる

なども味わい深く、

助かった自分をほめてやった　という

の震災の句も独自の観点、位置をしつらえ才能をにじませている。

山本　礫

老春という沸点はかなしいぞ
なまぐさし一錠二錠掌に
禄高で楽しく呑んで帰ります

高齢者社会の日本だが、このような句に会うと七十代もまんざらではない様に思える。

木本　朱夏

相見てのいよいよ重き十字架よ
こいびとをかえるわたしのころもがえ
鬼も蛇もかえっておいで淋しいよ

人恋いの熱さとさむさに触れて訴える作者であるが、佳句とそうでない句の差が目立つ。

紙吹雪長い手紙を切りきざむ　和泉　香
手紙出す小さな氷柱あるポスト　〃
晴れた日のこっぱみじんの黄色です　広瀬　ちえみ
どれほどの欲であろうか蛇動く　徳永　政二
願いごと呪いと少し重なりぬ　坂東　乃理子
愛懶惰睡蓮の花動かざり　笹田　かなえ
糸を切るこれしか凧を救えない　大橋　政良
落下傘好きだ好きだと降りてくる　峯　裕見子
乳房切開　熱持つ星がこぼれでる　倉富　洋子
黙祷のまなこ開けば倦んだ街　梅崎　流青
ひまわりの祈る形や原爆忌　あべ　和香

—選外佳作ともいうべき鷲谷美津子さんは温かいものがどの句にもひそみ、佐藤美文さんはその感性が穏やかな人間性に漉された句に注目した。岩間トキさんの硬質の抒情、岡本恵さんの自己凝視の句に感銘を深くした。

「半面美人」を推す
―なかはられいこさんの内なる明暗―

尾藤三柳

川柳界という閉鎖された世界では、読者が同時に作者であり、作者が同時に読者であるというのは、自明のことであり、それが川柳の本質にまでかかわっている。

どんなに新しい作品も、読者と出会った瞬間から、その読者の、作者としての部分の中で、多かれ少なかれ普遍化される。読者と作者という両面性をもった人びとによってささえられているかぎり、新しさとは、いつの場合も、ステレオタイプへの入口でしかないという宿命を、川柳は持っている。

もちろん、このことは、すぐに亜流があらわれるという現象だけを特定していっているわけではない。読者として受け止めたもろもろの情動が、作者としての深層にごく自然に蓄積されていき、新しさはそこで終わるということを、いいたいだけである。

西欧や中国の詩が、作られた時の新しさのまま、時代を越えて伝えられるのは、プロである送り手（作者）とそれ以外の受け手（読者）とが画然と分離されているからである。

江戸時代の前句附も、作者と読者が重なってはいたが、初代川柳評初期の古川柳が特にユニークであったのは、わずかな期間ながら、すぐれたプロの目を持った評者が、すべての受け手（鑑賞者）を代表して、一般求評者（作者）の作品を選択、提示するという、西欧や中国とは逆のシステムが機能していたからである。これは、初代没後数十年にわたる読者＝作者＝選者＝作者＝読者という、プロ不在の循環性が生んだマンネリ期と比較してみればはっきりする。

明治以降の川柳界も、この構造は変わっていない。読者が同時に作者であるという、いわゆるアマチュアリズムが、一般化と水平化の歴史を歩んできた。

詩の本性であるオリジナリティが見えにくい川柳の世界では「新」は当初「奇」として受け取られるのが常でそれが「新」と見られるころには、「派」と呼ばれる類型の中に均らされているという経緯の繰り返しが近代川柳の悲劇的側面であった。

「新」はいうまでもなく「個」でなければならないが、その「個」から解き放されなければ「新」と見做されないというジレンマを、われわれは絶えず抱えている。

『川柳年鑑』推薦の九五年度優秀作品選定に当たって、全国各誌の昨年度表彰作品などから二十作品を選び、川柳界以外の特別審査員を煩わせて、それぞれ三作品をチェックしてもらったところ、現代川柳に対するこれら知識人の眼識の高さに、戦慄さえ感じた。にもかかわらず私がひそかに期待していた一作品を挙げたのは、俳人の金子兜太氏一人だった。

その作品というのが、今回私が一席に推した〝なかはられいこ〟さんの、

持ちあぐむ卵一個の静謐を

だった。

昨年度の総評で、私は、いかなる「卵川柳」（私の勝手な造語だが）にも、もはや可能性は残されていないだろうという意味

以下30頁上段11行目へ

ある選後感

片柳哲郎

「想いのたけにすさむ」という事は、「己れの想いに殉じる」ことを言うのだが、これが純粋には果たせないのが現代性というものであろうか。川柳の量産至上は現川柳界の趨勢でもあろうが、その結果は一句のもつ魂、一句への確立などは消滅して、通俗小説のような一行一行が書かれはじめ、到底色紙に書いて座右に掲げられるものではない句が目立つようになった。

島道代氏を一席に推した理由の最たるものに、多くの川柳家がこの量産至上主義の結果喪失してしまった、神聖な感動体の本質が此処には在ったということである。これは、島道代という作家が頭脳だけで造られた観念的なものではなく、肉体で考えた構成があり、規定の三十句にはその一句一句に必然性があってひたむきに手を取り合い、互いに吸収し合っていると思った。極論すれば一句が死ねば他の二十九句も死んでしまうだろうと思われた。実はこの中に私としては消したい作品が二句あった。

月煌々闇いく枚を掌に掬う

手鏡の中にわたしがいなくなる

この技巧に過ぎた造り物には透明・純粋な作家精神が喪失していると思った。島道代が盲目の人であることを認識したのは、そのときである。そして、これは消し得ない作品だろう、と改めて思ったのである。

言葉の可能性を極度に拡大するのは短詩形作家の才能である。だがその意味を極度に圧縮する秀れた作家も発見できる。島道代氏はその後者であることに拍手を贈呈する。

前原勝郎氏を巧みな作家とは思わないが、まれに見る「私」を大切に扱う川柳作家だと僕は考えている。それは昨年の応募作品にして然り、今年もそれを第一に感じた。こういう作家は自分ひとりの「言葉」を抱えて、何処かへ逃げて行きそうな気がする。僕は新しい着想の川柳が、常に新しい時代の作物なのだとは思っていない。新しい着想が手垢のにじんだ単語をあちこちに移動させて新奇に構成しているのを見ると、一種のパロディを思わずにはいられない。こころが無くて姿だけが乱舞しているように思える。前原氏の作品は根底がしっかりしているので重層が見え、真摯の思いで創った泥の塔がここにある。

板東弘子氏の作品は芝居がかった工作の無い、生活の有る一連であった。それも〝旅人帰らず〟の思想が充実していて胸をうった。饒舌を排し、思いのたけを尽くした重量感のある作品で、一連を成した意義のある作であることを称揚する。

渡辺和尾氏の乱暴とも思える叙法は、そろしく割り切っていて情念に乏しかったが、何か新しい方法を採ってみようとする意欲が感じられた。

選外作品ではあったが佳品5句を挙げる。

精一ぱい生きて神様ほとけ様　庄子　喜一
魂が透き通るまで手をかざす　宮本めぐみ
この街をいつかは出ようガラス雛　斉藤はる香
ゆきずりの街で雨ふる古本屋　松本　幸夫
いちめんに人を許せし芝ざくら　桐越　千絵

選後感

酒谷愛郷

「わたしは現のあなたの歌い方には賛成できない。勿論あなたがそれまでの自分の歌に対して不満による、新しい境地を拓こうとする意欲は充分理解できる。ただ私があなたのファンになったのは、現のあなたの歌唱法でなく、デビュー当時のあなたの（うたごころ）に魅かれたのです」これは某歌手にむけて、某一ファンが言った言葉であるが、このことは、いかなる芸のマンネリズムもけっして誉められるものではないが、かと言ってそれまで構築した芸の色合い（個性）を、安易に変化させてもいけないと示唆していることともとれる。我々川柳にふりかえって見ても創作の過程において、多少の開きはあるが、大方がぶつかるマンネリズム。そのために余儀なく作風の転換を試みるが、果してどれだけ変容できるかは疑問である。仮に変わったとしても、それは表皮的な技法であって、その作家（作品）の内在する本質的な色合いは、必ずしも変容できぬが、むしろその必要ないかもしれない。一流作品の条件とは仮にマンネリであるとも、その作品の内包する情趣に、つい興味を示してしまうということも、あるいは必須の一つかも知れない…。

そんな感慨の中で今回の応募作品に対座して次の三人の作家にとくに心を魅かれた。

特選　柴崎昭雄

紙の鶴かつて父子のかおかたち
腹這いの跡のかすかなけもの臭
身のかぎり蟹と競えり月の坂

秀逸　板東弘子

踏絵以後影を濃くする亡夫は風は
亡夫の木椅子に蹟く様を見ていたか

秀逸　前原勝郎

藪椿かなしみぽっと微笑せり
頬杖やいつか花野で終りたし

この三人の作家に、共通することは〝自分は何を描くべきか〟の目的意識が一途であって、個々の作家の情感の昂揚は鮮明に誠実に読者に感受させることができる。ただ柴崎作品の〈一人が生まれひとりが果てる竹の節〉等のすでに手垢のついた作品をどう採否するかが今後の課題の一つであろう。また板東作品の〈何時までも川のほとりで桃を待つ〉等が気になった。彼女の資質を思えば今回の作品はやや張りに欠けていた。前原さんの作品のどこまでも清澄な抒情（生命）の風韻は良くても、情感の流れすぎが作品の内容を損なわないためには適切な言語選びが望まれる。

秀逸三位の柿木英一さんの〈秋ざくら母より遠きもの見えず〉〈葦笛を尋ねて行きし置きぐすり〉〈瀬を逸る流木なれば男歌〉等に刮目して氏の今後に期待をこめて頂いた。

その他の心にのこった作品

俺の顔を猿が離れない夕日　大谷晋一郎
いよいよと雨の匂いが夢の中まで　渡辺和尾
透明な波が来るまで肉体労働　樋口由紀子
風連れて疾るあてどもなく木馬　みとせりつ子
ダリヤ揺動その静かなる腕を添え　吉田三千子
雪の硬貨晴れる顔してパンを買う　桐越千絵

「戸惑いながら」

渡辺和尾

Z賞の13回募集は中止と聞いていたのだが、惰性で昨年度の『緑』誌を中心に作品だけは纏めてあった。そんなわけで、募集再開の報せに順応、参加した。

川柳をはじめたばかりの若い日に『柳都』の柳都賞をいただいたが、のちは『川柳ジャーナル』『川柳展望』や、この『Z賞』などで、かろうじて準賞という程度で、栄えあるところを遠く歩いてきたぼくである。三十年のこの道の中で、やや戸惑いながらではあるが、ことさらに嬉しいこと感激している。

これからも、微力ながらマイペースで進みたいので、いっそうのご助言、ご叱責をお願いしたい。

みなさん、ありがとうございました。

「こころざし」

なかはら　れいこ

ものを書くなんて、まして自分自身を書くなんて、何とやくざな作業でしょう。

それが、思いもかけず大きな賞を頂いてしまい、うろたえついでにサッサと貰い逃げでもしたいところ。だけど、要領が悪くて損ばかりしている男をどうしても放っとけないように、川柳にすっかりハマってしまった私には、逃げることなどかなわない。ならばどっかと腰据えて、見事添いとげてもみせましょう。

発展途上の私の作品を推して下さった選考委員の方々と、事務局の方々には、深い感謝とともに、重い責任をも感じております。

風炎賞以後を、作家としてどのように変容していけるのか、そんなことを真剣に考えながら、進んでゆきたいと思っています。

ほんとうにありがとうございました。

桑野晶子選

特選	渡辺和尾	愛知県
秀逸	樋口由紀子	姫路市
秀逸	伊藤紀子	北海道
秀逸	前原勝郎	津山市
佳作	板東弘子	香川県
佳作	梅崎流青	柳川市
佳作	野沢省悟	青森市
佳作	柴崎昭雄	青森県
佳作	なかはられいこ	名古屋市
佳作	西秋忠兵衛	八千代市
佳作	吉田三千子	名古屋市
佳作	秋元深雪	弘前市
佳作	桐越千絵	北海道
佳作	岩崎眞里子	黒石市
佳作	本多洋子	松原市
佳作	樋口仁	四日市市

岡田俊介選

特選	野沢省悟	青森市
秀逸	前原勝郎	津山市
秀逸	樋口由紀子	姫路市
秀逸	大谷晋一郎	高松市
佳作	島道代	青森市

佳作 板東弘子 香川県
佳作 柴崎昭雄 青森県
佳作 梅崎流青 柳川市
佳作 樋口仁 四日市市
佳作 なかはられいこ 名古屋市
佳作 吉田三千子 名古屋市
佳作 倉富洋子 青梅市
佳作 秋元深雪 弘前市

「寺尾俊平選」

特選 渡辺和尾 愛知県
秀逸 柴崎昭雄 青森県
秀逸 なかはられいこ 名古屋市
秀逸 梅崎流青 柳川市
佳作 佐藤美枝子 東京都
佳作 前原勝郎 津山市
佳作 樋口由紀子 姫路市
佳作 板東弘子 香川県
佳作 樋口仁 四日市市
佳作 吉田三千子 名古屋市
佳作 菊地俊太郎 東京都
佳作 岩崎眞里子 黒石市
佳作 宮本めぐみ 仙台市
佳作 野沢省悟 青森市

「吉田健治選」

特選 渡辺和尾 愛知県
秀逸 樋口由紀子 姫路市
秀逸 なかはられいこ 名古屋市
秀逸 菊地俊太郎 東京都
佳作 野沢省悟 青森市
佳作 普川素床 市川市
佳作 斎藤はる香 小樽市
佳作 樋口仁 四日市市
佳作 柴崎昭雄 青森県
佳作 倉富洋子 青梅市
佳作 柿木英一 大東市
佳作 山本忠次郎 東京都
佳作 広瀬ちえみ 仙台市
佳作 峯裕見子 大津市
佳作 伊藤紀子 北海道
佳作 西秋忠兵衛 八千代市

「八坂俊生選」

特選 坂東乃理子 加古川市
秀逸 梅崎流青 柳川市
秀逸 鷲谷美津子 秋田市
秀逸 倉富洋子 青梅市
佳作 峯裕見子 大津市
佳作 和泉香 滋賀県
佳作 島田小吉 東京都
佳作 あべ和香 花巻市
佳作 岡本恵 水海道市
佳作 笹田かなえ 八戸市
佳作 矢島玖美子 東京都
佳作 樋口仁 四日市市
佳作 鈴木南水 遠野市
佳作 福井文明 青森県
佳作 なかはられいこ 名古屋市
佳作 庄子喜一 仙台市

「佐藤岳俊選」

特選 西秋忠兵衛 八千代市
秀逸 柴崎昭雄 青森県
秀逸 広瀬ちえみ 仙台市
秀逸 笹田かなえ 八戸市
佳作 秋元深雪 弘前市
佳作 あべ和香 花巻市
佳作 藤村みどり 盛岡市
佳作 宮本めぐみ 仙台市
佳作 板東弘子 香川県
佳作 佐藤美枝子 東京都
佳作 倉富洋子 東京都

佳作 松本幸夫 福島県
佳作 渡辺和尾 愛知県
佳作 佐藤洋子 伊達市
佳作 西海枝みちこ 福島市
佳作 なかはられいこ 名古屋市

「橘高薫風選」

特選 秋元深雪 弘前市
秀逸 西秋忠兵衛 八千代市
秀逸 山本磯 京都市
秀逸 木本朱夏 和歌山市
佳作 和泉香 滋賀県
佳作 広瀬ちえみ 仙台市
佳作 徳永政二 守山市
佳作 坂東乃理子 加古川市
佳作 笹田かなえ 八戸市
佳作 大橋政良 砂川市
佳作 峯裕見子 大津市
佳作 倉富洋子 青梅市
佳作 梅崎流青 柳川市
佳作 あべ和香 花巻市

「尾藤三柳選」

特選 なかはられいこ 名古屋市
秀逸 矢島玖美子 東京都
秀逸 神谷三八朗 名古屋市
秀逸 秋元深雪 弘前市
佳作 岩間トキ 網走市
佳作 佐藤洋子 伊達市
佳作 樋口由紀子 姫路市
佳作 柴崎昭雄 青森県
佳作 広瀬ちえみ 仙台市
佳作 伊藤紀子 北海道
佳作 本多洋子 松原市
佳作 菊地俊太郎 東京都
佳作 鈴木恒子 多摩市
佳作 樋口仁 四日市市
佳作 板東弘子 香川県
佳作 笠嶋恵美子 高槻市

「片柳哲郎選」

特選 島道代 青森市
秀逸 前原勝郎 津山市
秀逸 板東弘子 香川県
秀逸 渡辺和尾 愛知県
佳作 樋口由紀子 姫路市
佳作 なかはられいこ 名古屋市
佳作 福井陽雪 青森市
佳作 岩間トキ 網走市
佳作 吉田三千子 名古屋市
佳作 柴崎昭雄 青森県
佳作 松本幸夫 福島県
佳作 岩崎眞里子 黒石市
佳作 伊藤紀子 北海道
佳作 長井すみ子 福岡県
佳作 大谷晋一郎 高松市
佳作 みとせりつ子 高松市

「酒谷愛郷選」

特選 柴崎昭雄 青森県
秀逸 板東弘子 香川県
秀逸 前原勝郎 津山市
秀逸 柿木英一 大東市
佳作 大谷晋一郎 高松市
佳作 渡辺和尾 愛知県
佳作 樋口由紀子 姫路市
佳作 なかはられいこ 名古屋市
佳作 みとせりつ子 高松市
佳作 吉田三千子 名古屋市
佳作 島道代 青森市
佳作 本多洋子 松原市
佳作 梅崎流青 柳川市
佳作 笹田かなえ 八戸市
佳作 北村泰章 高知市
佳作 桐越千絵 北海道

第14回川柳Ｚ賞作品応募要領

【作品】　創作30句を11組。

1995（平成７）年発表作品か未発表作品（原則）

【選考委員】

尾藤三柳（東京）	吉田健治（東京）
片柳哲郎（横浜）	岡田俊介（大阪）
橘高薫風（大阪）	寺尾俊平（岡山）
八坂俊生（香川）	西条真紀（岡山）
佐藤岳俊（岩手）	酒谷愛郷（伊万里）

【応募用紙】13回までと同じＢ４専用紙。ワープロの方は専用紙に準じて下さい。用紙の必要な方は、返信用封筒を同封の上事務局まで。専用紙以外での応募はご容赦下さい。

【会　　費】不要です。が、入選作品集を希望の方は￥1,250（〒共）を振替等（**切手不可**）でお送り下さい。二冊以上希望の方は、一冊につき￥1,000加算して下さい。

【　賞　】大　賞　15万円と記念品　１名

風炎賞　記念品　１名

優秀賞　テレカ　若干名

【締　　切】1996年１月31日消印まで

【送 付 先】030－13　青森県蟹田町145川柳Ｚ賞事務局

【問合わせ等】川柳Ｚ賞選考委員会事務局　杉　野　草　兵

FAX 共・0174－22－3537

【振替口座名】川柳Ｚ賞【口座番号】02350－５－2718

★Ｚ賞テレカ（50度）を￥1,000で入選者にお頒けします。ハガキかFAXでお申し込み下さい。差益は会計に組み入れます。

事務局より

選者の方々の奉仕、応募のみなさんのご協力による、第13回入選作品集をお届け致します◆一点を取るのも難しい公募ですが、若い方々のトライをお待ちします◆風炎賞は若い作家を励ましたい目的です。選考結果を重視しながら事務局で決めさせて戴いております◆誤字脱字が稀ですがあります。応募前に確認して下さい◆データの整理にコンピュータを使用しておりますが、ソフトに年齢の項目があります。氏名同様公表はしませんのでお書き下さい◆校正にＴ雄氏とＭ子さんの応援を得ました。（杉野草兵）95・08・12

第十三回川柳Ｚ賞入選作品集

発行日　一九九五年八月十二日
編集人　天地聖一
発行人　高田寄生木
発行所　川柳Ｚ賞選考委員会
〇三〇－一三　青森県蟹田町一四五
☎〇一七四－二二－三五三七（ＦＡＸ共）
頒　価　一、二五〇円（〒共）
二冊以上一冊につき一、〇〇〇円加算
振　替　川柳Ｚ賞
口　座　〇二三五〇－五－二七一八
印刷所　コロニー印刷
住　所　青森市大字幸畑字松元六二－三
ＴＥＬ　〇一七七（三八）二〇二一